

著者の自白

余は哲學者に非ず、又科學者にも非ず、唯一介の書生也。余は人を
嚇すべき勳爵なく、又形質を以て俗を驚かすべき資力なき、唯貧し
き一個の平民也。余は偉大なる宗教家に非ず、又高德の君子にも非
ず、基督によりて救はれたる唯一個の罪人也。余は神學を知らず、
又道德の解釋に暗し、唯薄信なる一個の信者也。余は傳道者の試験
に及第したる傳道者に非ず、又監督によりて按手せられたる牧師に
もあらず、唯一個の浪人也。

あ、數へ來れば無學の書生、貧しき一平民、罪人、一信徒、浪人、こは
余輩が帶ぶる最高の稱號なる也、何ぞ夫れ憐なる。

然れ共、われ神に感謝す、そは神は學者にのみ其奧義を示さずして無學者なる余輩にも天上の秘義を語り給ふが故なり。又神は人生の慰安と永生をば貧くして資力なき一平民にも分ち給ひたるを以て也。又基督の愛は獨り宗教家、君子のみが談じ得るものに非ずして余が如き救はれたる罪人にも語り得るが故也。又神の恩恵は薄信なる余輩にも解せられ、浪人なる余輩の如き者にも傳へ得らるゝを以て也。加ふるに何の幸福か、われ愛兄弟の同情を蒙るや深く人々に愛せらるゝや厚し。あゝ我何を以てか神と人々の同情に酬いんや、他なし三寸の舌と五寸の筆とを振つて満腔の熱誠を吐き出さんのみ、尙之にし及ばずんば我が熱血をも注ぎて之に献げんのみ。

純 火 焰

目 次

- 耶蘇の聖名……………一頁
- 悪魔の近世思想……………七頁
- 活ける基督……………一四頁
- 古びたる旗を翻せ……………一六頁
- 十字架なき基督教……………二二頁
- 神の偏狹……………二三頁
- 聖徒の死……………二四頁
- 不變の耶蘇……………二七頁
- わが信する者……………二九頁

- 現世の運命……………三二頁
- 歳暮の感謝……………三二頁
- 年頭の讚美……………三四頁
- 千年期時代近けり……………三六頁
- 新年の祈……………三八頁
- 断片(一)……………四〇頁
- 迫害よ來れ……………四五頁
- リバイバルよ來れ……………四八頁
- 断片(二)……………五一頁
- わが生涯……………五七頁
- 狂犬的人物……………六一頁



- 理論よりも事實……………六三頁
- 主の聖顔……………六七頁
- 断片(三)……………七三頁
- 悪魔の信仰……………七六頁
- 断片(四)……………八一頁
- 絶えざる主との交通……………八七頁
- 悔改めよ……………九一頁
- 断片(五)……………九七頁
- 献金論……………一〇二頁
- 明日なる希望……………一〇七頁
- 傳者の希望……………一〇九頁

●断片(六) 一一二頁

●責めらるゝ者の友 一二九頁

●新郎の呼聲 一三二頁

△讀者之を諒せよ▽

△此書は殆んど既に新聞雜誌に寄稿したりしものにして新作に非ず、讀者之を諒せよ。

△載する所悉く單片、廣大なる思想なく、深奥なる解釋なし、讀者之を諒せよ。

△雖然個々の文字を綴りたるもの、組織なく秩序なし、讀者之を諒せよ。

△加ふるに文章は拙劣也、たゞ意味を壯せよ、若し意味にして通ぜざるあらば、讀者之を諒せよ。

△讀者之を諒せよ▽

純火焰

野邊地三右衛門著

耶穌の聖名

耶穌なる聖名は如何計り我に貴く又慕しき事よ。世に多くの英雄あり豪傑あり其名は青史に輝然たりと雖も、いかで我が主の聖名に比ふべき又わが記録に幾多の記憶すべき人々の名ありと雖も、わが主の聖名のみは我が心に彫まれあるなり。わが記憶しばく人々の名を忘るゝ事あれども我が瞬刻も忘るゝ事なきは唯耶穌なる聖名にてある也。

あゝ耶穌、懐しき耶穌の聖名は、之れ實に調子は高く餘韻の無限なる音

耶穌の聖名

樂の如く、我これを聞く時に我心は躍り我靈は喜ぶなり。

△そは我罪人たりし時

誰ありて我を救ふ者なく、誰一人わが頼れたる靈魂に生命を與ふる者なかりき。

「蓋天下の人の中に我儕の依頼て救はるべき他の名を賜されば也」(使四〇)
「凡て主の名を願求る者は救はるべし」(羅十〇) ア、我を死と悲哀と永遠の滅亡とより救ひし者の名は耶蘇にてありき。

△我舊き人に苦みし時

あゝ我は苦しかりき、我は日々苦さの餘りに叫び出せり、我心は日々に斯く曰ひぬ「噫われ困苦人なる哉この死の体より我を救はん者は誰ぞや」

われは早や我衷に居る舊き人と戦ふて勝つと能はざりき、我は種々の方法を試みて失敗せりき、我は己が力も其他の能力もわが舊き人を殺すに甲斐なきを悟りたり、其時われをば潔めわが舊き人をば十字架に釘けたりし者の名は耶蘇にてありき。

「是われらの主イエスキリストなるが故に神に感謝す」(羅七〇)。

△死の刺我に襲ふ時

あゝ我病めり、わが友死せり、われ亦死なざるべからざるか。我如何にすべき、我何にたよるべき、われ何によりてか慰めん。それ人は草の如く其榮華はすべて野の花の如し、心細きは病める我の生涯にてありき。然れども「イエスキリスト汝を癒す」(使九〇)、我病を癒せる者の名は耶蘇にてありき。然り而して更に「死よ爾の刺は何處にあるや、陰府よ爾の

勝は何處にあるや、我儕をして我主イエスキリストに由て勝を得しむる神に感謝す(哥前十五)。

オー我を死の刺、死に關して不安ならしむる恐怖より我を離れしめ給へる者の名は耶穌にてありき。

△我誤解を蒙りし時

人わが言はざるを言へりと言ひ、わが行ざりしを行せりと念ふ、人生誤解程恐しき者すくなからん、我誤解せられたり、人われになき惡を傳へわが善をもて惡と做す、あゝ我如何にすべき乎。

我は、凡ての呪咀と凡の嘲罵と凡ての耻辱とを蒙りたまへる主耶穌を仰見たり。我は其時却りて自己の不完全なるを悟りて謙遜れり、我は其事に遭ふは寧ろ當然なるを知りたり。而して主耶穌の平安は再び我心に來

り我は二層の奮勵をば加へられぬ。

△我が失意の時

わが計畫は破れ、我が願望は叶はず、わが希望は成らず、わが願達せず、あゝ我が失意の時我が友も我を慰むるに詞なく、我を助くるに術を知らず、あゝわが慰藉は誰あるべき。オー耶穌よ「我心の儘を成んとするに非ず聖旨に任せ給へ」(太廿六)と祈りて神に服従したまへる爾のみ、オー唯爾こそわが失意の時の慰藉なれ。

△我れ愛人に棄てられし時

我愛人に棄られたり、われ彼を愛せるに彼われを棄て去れり。我れ神聖なる我が愛を無視せる彼を憎むべきか、破倫の彼を咀ふべき乎不義なる彼を責むべきか。

否々我は何事をも語はざるべしまた何事をも爲ざるべし。而して耶穌よ爾は己と偕に食せし者すら踵を擧げたる時如何になし給ひしや、然り爾は「その人生れざりしならば反て幸なりしならん」(太六)と仰せ給ふ程親切にて在しませし。

オー耶穌よ、我も其愛をもてわが心の悲哀を忍ばん哉。祝福を彼の爲めに求めん哉。

△我幸福なる時

われ得意なり、われ盛んなり、我成功せり、我繁昌せり、我富裕になりぬ、われ好運となりぬ。我仕合よくなり、我希望達し、わが願成れり。我誰と偕に喜ぶべき、我誰と偕に祝すべき、我誰の爲めにか歌はん。オー耶穌よ、我満腔の感謝を誰にか献げん、我誰に献げんわが利を我が

成功を、われ誰の爲にか盡さん我が富を、わが生命を。あ、唯爾の爲めにせん、唯爾の聖名の榮崇られん爲め(詩百四十三)。

惡魔の近世思想 (二)

古來、惡魔は神の國の御事業を毀たんが爲に種々なる議論を此世に投込みました。勿論此思想は人心に投せられ之を説き之を主張した者は時代の學者でありました。而して仲々有力なる人物もありましたが彼等の主論は無神論でありました、所謂無神無靈論でありました。

然れ共近世に於ては、惡魔は此議論を用ひません、却て彼は盛に有神論を主張いたします。之れが即ち注意すべき彼が近世の思想であります。こは彼が此丈神の國に降服して來たのでなく却て彼は爰に愈れる新紀元

を開いたものであります。彼は飽迄で偽をいふ者の父であります、彼は進歩せる奸謀者であります、彼は飽く迄で神に逆ふ者であります。彼は如何にしてか一人にても多くを救はんとし給ふ神に反抗して一人にても多くの靈魂を滅亡に到らしめん事を謀りつゝあるものであります。而して有神論は彼の事業に大打撃を與へる様なものですが其實大に彼が計畫を遂行せしむるに安全なる保護を加ふるものとなりました。然れば永年無神論者たりし彼は其目的を達せんがために其持論を枉げ、其思想を棄つるに躊躇いたしませんでした。無主義、無節操、權謀術數は彼の常とは申せ、彼が思想の變化は實に驚くべきものであります。彼は斯る事を敢てした丈けそれ丈け彼が思想の中に偉大なる計畫が組立てられて居るのであります。されば今日天下翕然として有神論に風靡せら

れて居りました。誠に喜ばしき事でありましたが油断は出来ぬのであります。神無しといふ者は時世後視せらるゝ様になりました。今日、天下の上下こぞりて基督教に耳を傾くる今日、悪魔が非常に成功しつゝあるものであります。扱て彼は有神論を楯として如何なる事を講じつゝありませうか。余輩は次段に於て之を述べん。

悪魔の近世思想 (三)

悪魔の近世思想は有神論である、彼は之を傳道し成功し多くの人々を巧に滅しつゝある事は既に前段に於て申述べました。斯の如く彼は一神教者であります、此點に於て彼は立派なるユニテリアンであります、否基

督教者と其思想を一致せしめて居ります。併し乍ら基督論に到て悪魔は全々其殊質を發揮して居ります、我儕は約九〇廿四に於て彼の宣言を讀む事が出來ます、即ち「榮を神に歸せよ我儕は彼人の罪人なるを知る」と申しました。人の救はるゝは獨一無二の存在者を認めたらなくてはならずして其子耶穌基督を信する事にあるが故、人が如何程有神論者となりましても基督を信じないならば彼の商賣には何等の損害をも及ぼさないものであります、却て神の存在を認めしめ我神の子供なりと悟れば救はるべしと安んずる似非信者を多く造り信仰の極意是に在りと意はしめ、更に進んで救主基督に信頼する必要を感せしめず抑置き斯くして彼等の憐むべき靈魂を見事に地獄の深淵に投込むのであります。

斯くして彼は飽く迄で基督をば信せしめぬのであります。彼は遠く三世紀頃アリウス説の起りし頃より、其後のソシヌス教、今日のユニテリアン及び或一流の神學者等と同盟して基督の超自然を否定し、其豫先的存在を拒み單に偉大なる一個の人格となし、豫言者の一人となし、嘗ては彼のフランシス、ニューマンをして基督は詐偽者なりと迄で言はしめた事もあります。

然るに基督は飽く迄で自己を信すべしと要求し給ふのであります約十四〇一に「なんぢら心に憂ふること勿れ神を信じ亦我を信すべし」と仰せられしは神を信する信仰と同等の信仰を彼になすべき事を要求し給ふたのであります。我儕は基督を信せずして救はるべき事を聖書に見出す事が出來ません、舊約時代に於ては如何にといふに其時代と雖も基督は存

在し給ふた(約八〇)故に彼の模型なる牛羊の犠牲を要したのであります、
 之れは贖罪に關して是非必要なるものであつたのであります(廿九〇)。
 そこで羅馬書三〇廿四は舊約に溯り新約に通じて「唯基督耶穌の贖に賴
 りて」と論結して居るのである。此「唯」といふ文字は其他のものをば全
 く否定したものであります、彼使四〇十二にある「此外別に救あること
 なし」といふ言と表裏相俟て同一意味なのであります。而して之は救の
 極意、天下唯一の救は基督を信するてふ事を與義とするもので如何なる
 罪人にてても此の途に立ちさへすれば容易に救はるのであります。
 此眞理この思想は悪魔の禁物であります、彼は決して之れに同意いたし
 ません、否彼は全く反對であります、彼は極力反抗いたします、此事實
 を否定いたします、これが悪魔の近世思想であります、約言彼は神を示

して基督を隠さんとするものであります、神を説て基督の贖罪を駁する
 ものであります。

斯くして彼は人に救を求めしめて之を其途に向はしめ之を得ざらしむる
 ものであります、之は人々の求道心に反抗し無神論を楯にして争ひ苦戦
 するよりは遙に容易にして又成功ある方法なのであります。實に悪魔は
 何れの時代に於ても我儕が想ふよりも恐ろしき者、決して油斷のならぬ
 者であります。人よ如何に彼の近世思想と其應用手段の巧妙にして苛酷
 なる事よ、然れ共これ奇しき事に非ずサタンも自ら光明の使徒の貌に變
 する也、あゝ信者なりと稱し神を公父と認め我人類は皆神の子なりと自
 覺すれば救はるべしと思意する人よ、そは誤謬なり虚偽也、神を信じ基
 督を理想と仰ぎて善美化せられんと力むる人よ、そは不可能の徒事なる

也。自修鍛練以て罪より離れなば神に救はるべしと欲ふ人よ、そは其途に非ざる也。夫等は悉く非聖書的也。悉く悪魔の思想に孕まれたるものであります、願はくは人よ一躍昂進して更に基督に來れ。

(完)

●活ける基督

我儕の基督は唯理想的觀念に畫かれたる基督に非ず、また過去曾て存在したる事ありといふ記憶上の基督にもあらず、又神學の解剖室に横はれる冷かなる死骸にもあらざるなり。若し然ありしならんには我儕もアン・ドルー、アルノールドと共に左の如く歌ひしならん、曰く

今彼は死せり、其遺骸は

淋しきシリオの邑に横はる

其墓上には輝く眼もて

スリヤの星見下せり

と、然れ共われらの主は斯る基督に非ず、我儕の基督は我儕の理想に畫かれあると共に我衷に在す實在者、過去に存在し給ひしと共に現在の主また將來の審判者たるなり、また永遠の道(約一)萬世の王(提前一)平和の君(賽九)又我儕の救主(路二〇)我儕の原罪を潔め我儕の病をも癒す(約壹一五〇)活ける存在者也。

我儕は此基督を聞いてこそ始めて心に希望の光を認め得べく、又此基督を信じてこそ始めて心に満足を得らるゝなり、あゝ彼は我儕が要求の一切を満し得る活ける基督也。

古びたる旗を翻せ

オー古びたる旗を、古き旗を、千九百年の昔かのカルバリーの山上に
 翻りたる血まみれの旗を、十字架の旗を。吾人の翻すべき旗は之れ也
 而して唯之れのみ。吾人は此旗を翻して以て奸悪なる世俗に進軍すべ
 く、吾人は此旗を翻して以て社會の邪惡なる思想と奮闘すべき也。吾人
 の使命は此旗に據り、此旗を守り、自己の生命を此旗と共にせん事にて
 ある也、あゝ懐しき旗よ。此旗ありて爰に千九百年、以來この旗を守ら
 んため實に二千萬の犠牲は献げられて惜まれざりき、又今も尙ほ幾多の
 鮮血は之を守らんためにと献げられつゝある也、オー光榮ある血まみれ
 の旗よ。

其記號や頗る明晰、唯一個の十字架を印するのみ、而して其意味は何ん
 ぞ、曰く「神の子基督が萬民を罪より救ひ且つ潔めんため十字架に釘ら
 れ給へる確實なる事實」之れ其旗の表す處にしてまた無上の誇とする處
 なり。

人これを見て古きに過ぐといふ人これを稱して舊思想といふ、或は之を
 評して時世後と做す。然り古し、時世おくれなり故に古びたる旗と預め
 之を言ふ也。

今や世は新しきを歓迎す、社等人智は、皆新しきに心酔す、而して諸般
 の事皆新しき事の發展に力む、吾人は之を否む者にあらず、却て之と共に
 走らんと思ふ者、否これに先んじて指導せんと思ふ者也、然れ共、吾人
 新しきを追ふが故に古きは悉く之を棄つべきか、否新しと雖も取るべか

らざるものあるが如く古しとて亦棄つべからざる物あるを知らざるべからざる也。

視よ、二十世紀の新世界を照す太陽は依然として古き／＼開闢に存したるものにはあらざるか、今日の世界は白晝を欺くが如き電燈を點じ得ると雖も何ぞ夫れ太陽が放つ一條の光線にだも及ばざる事の遠き、宇宙は此古き一塊の太陽を棄つる事能はざる也。

夫れ斯くの如く吾人は新しきを愛すと雖も此一流の古びたる旗をば棄つる事能はざる也、吾人は之を固守す、而して倦まず尙且つ新しき旗幟を樹立せん事をも勉めざる也、吾人これのみは古き儘にて振り翳し敢て血にまみれたるを洗ひて人目に添はん事をも勉めざる也。

何んとなれば此世界を照し此世界を活すものは彼の古き／＼太陽なるが如く、暗黒に泣く人の子に希望を興へ枯骨の如き人の子の靈性に永生を興ふるものは實に古き／＼血にまみれたる十字架の旗にてあるが故なれば也。

夫れ人生あつて六千年（こは通俗の計算をいふその年數は敢て問ふ處に非ず）人類は世々性情の邪惡に悶えつゝ、暗黒の經路をば辿りつゝある者噫々此邪惡／＼之は人類の心底に深刻せられたる難物にして人類の歴史を亂せるもの社會の秩序を攪亂しつゝあるもの、國を亡ぼし民を永遠に亡ぼし去るもの自己の能力を以て到底矯正除去する事の能はざるもの也。而して古來、人類を此邪惡より救はんために幾多の技師（別名を聖賢また學者と稱す）が各々新しき旗を擧げて或は哲學なる金槌を振ふて之を打碎かん事を試みたりき、又神學てふ貢材を以て除き去らんとは力

めたり、或は修養なる砥石を以て滅さんとなしたりき、或は道徳てふ事に乗せて運び去らんともなしたりき、噫然れども皆悉く徒事なりき、人類の邪悪は依然人類を束縛して毫も之より解脱する事を得ざらしめき、哲學も神學も、文學も科學も人類の思想を開發せしむるに於て偉大なる効果を與へたりしも心靈の救済には何等の貢獻する所なき也、而して人類は益々其苦境を深うして其止む所を知らざるに非ずや、ア、如何にすべし。

是に於てか、吾人は大膽に人々に指して曰はん、視よカルバリー山上の古びたる旗を、血まみれの旗を。ア、十字架の血に生命あり、慰安あり而して之れ罪惡を根底より打破する處の爆裂彈也。

噫々今の基督教は此古き旗を厭ひはじめたり、其餘りに古きと血を

を耻かしく思ふに至りたり、世俗の進歩と無用の新しきを競はんとして神學や自由派の旗を翻しはじめたり。人或は其旗下に集まりて或は頭腦の満足を得て快と曰はん、然れども其種の基督教は最早生命と活る能力とを與ふるの宗教に非ざる也。

吾人それら幾多の新旗幟の盛んに翻れるを見るの時轉たその大なる勢力に驚かざるを得ずと雖もそは悉く虚勢なるを見る時に寧ろ憐まざるを得ざる也。

オー古びたる旗、十字架の軍旗、千九百年の生命を維持せる血まみれの旗よ、願て全世界を風靡すべき旗よ、吾人は願て來らんする軍旅の將耶蘇基督の再來を待ちつゝ此旗に據り此旗を守らん、オー古びたる血まみれの旗を翻せ。

御旗をかざして いざたゝかはん
なびかぬあたなき このみはたを

(讚美歌二百七十七)

●十字架なき基督教

諸君よ、若し講壇が諸君に向つて基督の十字架を説かないならば、諸君宜しく耳を掩ふべし。

何んとなれば其説教は諸君を咀ふところのものである、諸君に一層絶え難き重荷を負はしむる處のものである、その説教は諸君を耻かしめ、諸君を一層の苦悶に陥るゝ處のものである。

何故なれば十字架なき基督教は哲學の思想、倫理の解釋や幽遠なる文學

的觀念を興へるには立派なるものであるかは知らねども罪惡と悲哀、苦痛と不安とに満てる吾人の靈性を救ふに於て何等の能力を興へるものでない、此等を打破して新しき生命に吾人を入らしむるものは唯基督の十字架である。

世に十字架なき基督教はど詰らないものはない。

神の偏狹

神は御自身を敬はざる凡ての道理と凡ての教理を憎み給ふ(哥後十)彼は御自身を信せざる者を天國の榮光に入れ給ふ程には寛容でない。

彼は其獨子基督の神性を否定するものを憎み給ふ(約壹二)○廿三)神の其子の寶血の効力を信せざる者を潔め給はない、神はかゝる者の爲に天國の門を

開き給はない。

偏狭なる神は罪人の其儘神の國に来る事を得ざらしめん爲に狭き門を作り給ふた(太七〇)。

神は御自身の言葉を重んじ給ふ、彼は其聖語を永遠に不滅ならしめ給へり(太廿四)、而して此を拒むものを憎み給ふ、彼は其聖言に示したる教理を蔑視するものを憎み給ふ。

例令、神は凡ての人の救はれん事を欲み給ふと雖も彼を信せざる者を救し、悔改めざる者を救ひ給ふ程の雅量(ようりやう)を有し給はない(路十三)。此點に於て我儕神を愛する者は充分彼の如く偏狭なるを要する也。

聖徒の死 (伊中兄の昇天)

吁、兄弟は永眠せり、世は一人の聖徒を失へり。

聖靈に満されたる聖徒は逝けり。

あゝ誰か之を聞いて彼の死を悼まざる者ぞ。

余の彼を識る去る六年の昔にてありき、即ち明治卅四年の春、而して彼は余の先輩にてありき、また余に熱心なる同情の人にてありし。

而して彼の生涯は始終、競ふ事なく喧ぶ事なく人街に於て彼の聲を聞くことなきもの、至誠なる祈禱の人、隠れたるに忠なる傳道者にてありき。

彼は説教家には非ざりし然れども彼の熱誠は聞く人をして感せしめたりき、彼は人に對して雄辯ならざりしも神に對して雄辯なりし也。

彼は人を樂しましむる愛嬌を有せざりき、然れ共彼が天賦の沈黙は輕卒

なる我儕をして敬虔なる念慮に與らしむる事をなさしめき。
 彼は謙遜にして柔和なりき、未だ嘗て激しき言を出さざりき。
 彼病に襲はるゝやヨブの如くに忍びたり、彼更に咬く事をせざりき、彼
 更に恨むる處なかりし也、而して幾多の不如意に耐へ、幾多の困苦に打
 ち勝ちて進みたり。而して遂に逝けり、今や彼此世になし、然り彼の父
 は天上の樂園に慰はすべく彼を携へ給へる也。此世の苦痛を困苦に勝利
 ある戦をなせる彼は凱旋の天に迎へ入れられたる也。
 嗚呼兄弟よ逝け、逝け、頓て會はん黄金の丘に、主イエスを携へ來り
 給はん日に。
 眠れよ、其處に、末日のラツバの響く迄で。我儕は汝に代りて祈らん汝
 の家族のために。

あゝ友よ、汝は榮光の冠を受けんとて其所に往きたるか、我儕も頓て往
 かん。
 而して其日まで我儕は此地にて汝の神を讃めん、汝をして善良なる聖徒
 の生涯をなさしめし汝の教主を讚美せん。

青山の原頭に彼を葬るの日

これ明治卅八年を送り、新たに明治卅九年を迎へし當時の所感也

●不變の耶蘇

オー主耶蘇よ、爾のみ不變なり。
 不變、不變これ如何に我心を慰め、我心を安んせしむるものぞ。
 不變なるもの、無き世にありて爾のみ獨り不變也。今年去りて年來ら

んとす。

われは此去らんとする年に於て多くの變動を見たりまた意外なる變化を見たり。

世道人心の如何に移り易きかを見たり。

時代の潮流も人々の思想も常に定まる所なきを見たり名譽も財産も如何に變り易きものなるかを學びたり人々の愛、人々の信念、人々の熱心も何時しか變るものある事を教へられたり。

オ―天も地も、月も星も皆變るべし、然り宇宙乾坤皆變らざるはなし。不變なるはたわが主耶穌のみ。

「耶穌基督は昨日も今日も永遠も變らざる也」(希十三〇八)

とは如何に偉大なる文字。實に主耶穌の不變は「萬綠叢中紅一點」とも

言つべく天下何人か斯言をいひ得るものぞ。

ア―主よ爾の聖言も、爾の約束も、爾の血の効力もまた爾の熱愛も不變なり、來年も永遠も。

有爲轉變の世にある我は爾の不變に安んじて此歳を送る。

●我信する者

一年は一年より近く我を永遠の世界に運ぶ。

而して我を運び、我を近かしめ、我を彼の日に至らしむる者は命なき「時間」にあらず。

我が信する者即ち主耶穌なり。

我は彼を知る、彼は不變者である、我は我自身を彼に託したり。

あ、誰か我を永遠に守り得るものぞ、世の帝王も英雄も、富豪も貴族も彼等の存在は實に暫時のみ、永遠に比しては實に瞬間のみ。故に永遠の事業は彼等の爲し得る處に非ず、縦し千の帝王、百の英雄ありとはいへ。

唯不變の主、即ち萬世の王朽す見ざる耶蘇のみ、彼は賤しき我如き者をも今日迄で守り給ひたり、わが彼に託したる、全身全霊を、救を聖潔を、彼は過去の年に於てなし給へるが如く來らん年に於ても我を守り給ふべし。

是故にわれ彼の爲に受くる苦と斷とを耻とせず蓋はわれ我が信する者を知り且わが彼に託したる者を彼かの日に至る迄で守る事をなし得ると信すれば也(○十七)我斯くかれを信じて此歳を送る。

●現世の運命

我儕は斯の如く年を送り年を迎ふるにつれて次第に理想の故郷に近づきゆく。

其處は「義と和と聖靈によれる喜悦」に満てる所、生命の水のある處、死と悲哀のなき所、愛と望の湧く所。その天のカナンは我儕の國である。然れ共、呪咀と滅亡とを宣告せられたる現世は一年丈け罪惡の齡を重ねたり。世は一年丈け邪惡なれり。現世は人々の思ふ如く決して善美化せられつゝは居ない。益々惡に傾きつゝある。次第に火と硫黄の燃ゆる淵に臨みつゝある。サタンは己が前途の幾干もなきを知りて極力此世を擾亂しつゝある。アー憐むべき現世の運命よ。

我は前途の光明を望みて、此恐るべき世に告別するの日を待ちつゝ此歳を送る。

●歳暮の感謝

明治卅八年も今爰に暮れんとし、明日一日にして歸らぬ過去となつてしまふ。

余輩は此歳暮に當り恰も夕陽西に沈んで静かなる暮昏の如くに思ふ、静かに、遙に過ぎ來し方を思へば實に幾多の感想胸に躍りて目の當りに見るが如くに感ぜらる。アアあの時よ、かの時と。

然れ共それは皆悉く神の御恵であつた。聖靈の御能力であつた。十字架の血の功績であつた。

我はその中より自己の價值、自己の能力、自己の成功といふものを一つも見出す事が出来ぬ。

思ふて爰に至れば、余輩はたゞ無限の感謝に絶えない。感謝、感謝たゞ感謝のみ。

あゝ彼の絶え難き苦痛も、懲戒も、悲哀も亦今は皆感謝の色具をもて潤筆せられ。幾度か流せし涙の滴筆も今になつては皆悉く神の愛を刻たる玉の如くに見ゆる。

あゝ人生は夢でない以上はこの一年くも決して夢でない。みな永遠の生涯を刻みつゝあるもの、我は此年を送るに眞面目なる感覺を以てする。而して此夢ならぬ一年の生涯に於て蒙りし聖恩の鴻大なるに感泣する。感謝のうちに此歳を送る。

●年頭の讚美

愛する友よ、我儕をして先づ第一に三一の神を讚美せしめよ。

オー三一の神エホバ。即ち恩恵ある父、慈愛深き主、能力ある聖靈の聖名のみは我儕の永遠に讚美すべきもの也。

蓋は神のみは我儕を救ひ、われらを潔め、われらを癒し、我儕をして榮光の國に入らしめ給ふを以て也我儕は彼の外更に優りて讚美すべき他の名を賜らず又我儕は福音の使命を奉じて起つに於ても彼の外に何者をも頼まざるが故也。

我儕には彼の外に讚美すべき権力なく、學力なく、金力も亦あることな^くして唯讚美すべきはエホバあるのみ。斯くして我儕の愛、我儕の能力

も悉く彼より來り、彼より出づるが故に我儕には彼の外に誇るべきものなく、彼の外に讚美すべき者あらざる也。彼は我儕の萬能にして我儕を今に迄で到らしめ給ひたり、而して來らん將來に於ても亦然あらん事を確信す。我儕は今も後も彼の外に頼るべき者なきが故に彼をのみ待み、彼をのみ讚美して従ふ也。

我儕は此年彼のみを讚美して進まん、年頭より讚美し、讚美して年末に到らん。

オー榮光あるエホバ三一の神よ、たゞ爾のみ讚美榮光を受くべきもの也。

神ラマンより來り聖者バラン山より臨みたまふ、其榮光諸天を蔽ひ、其讚美全世界に遍し(哈三〇三)

●千年期時代近けり

我儕は前項「現世の運命」を題して「呪咀と滅亡」とを宣告せられたる現世は一年丈け罪惡の齡を重ねたり、世は一年丈け惡しくなれり、現世は人々の思ふ如く決して善美化せられつゝは居ない、増々惡に傾きつゝある、次第に火と硫黃の燃ゆる淵に臨みつゝある、サタンは前途の幾日もなきを知りて極力此世を攪亂しつゝある、アー憐れむべき現世の運命よ」と論じたり。然り實に夫に相違なしと雖も、現世が其憐むべき終局を遂ぐる前一度は黄金時代と化する事あるを知らざるべからず。それ即ち千年期時代にして聖書に明記する處なり。

而して必らずしも一年三百六十五日が千度を繰返すの千年なるや否は知る處にあらずと雖も兎に角、基督の王國と理想の社會とが現實にせらるゝや必然なり。之れ即ちエダヤ人が永く理想せる地上の天國にして基督が諸王の王となり正義と公平とを以て全世界に君臨し給ふの期たる也。

「民は其劍をうちかへて鋤となし其鎗をうちかへて鎌となし、國は國に向ひて劍をあげず、戰鬥の事を再び學ばざる」(賽二〇四)の時代、惡魔の跋扈は中止せられ、不義罪惡の横行はゆるされず、秩序整然上下其悦を偕にし、平和は全地に漲りて再び悲惨なる兵火を見る事なきに至るの時代なり。

而して此時代は現時代の進化、改良に依て顯はさるゝ結果に非ずして、主基督の再臨に依りて成さるゝ神爲的の顯現なり。

オ一天國は近けり悔改めよ、我儕は一年丈け此輝ける地上の王國に接近

せるなり。

●新年の祈

「エホバわが磐わが贖主よ、わが口の言わが心の思念なんちの前に悦ばるゝ事を得しめ給へ」(詩十九〇十四)

新年は來れり、希望に満てる年は來りたり、我儕は此年頭に於て何を祈るべき乎。

我は此年偉大なる事業を成功せん事を祈るべき乎。

將た又盛んなる働をなして人目を驚かさん事を祈るべき乎。

否々、我は然か祈らざるべし。

我は唯かく祈るべし、「オー親しき耶蘇よ、今年も亦汝のみまへに悦ばる

ゝ事を得しめ給へ」と祈らん。わが最高の希願は唯主に悦ばるゝ生涯をなさん事である。

我は彼の所有、彼の血に買はれたる者、われは彼に悦ばるゝ事の何等の願もないのである。時々刻々一步々彼を悦び悦ばれつゝ暮し度い、

彼に悦ばれずば成功も事業も何かせん、オー耶蘇よ、我は此年、爾の忠僕エノクの如く主と偕に歩み、彼に悦ばれ度い。(番十一〇五)

若し夫れ主を悦ばし奉るためならんには、時も所も何をか擇ばん、如何に耻づべき事にて。艱難辛苦何かあらん、身も魂も何かせん。オー

主エホバよ、我は唯なんちに悦ばるゝ事を得しめ給へと祈る。(以上)

●福音の領土

普く天下に宣傳へられん(太廿四)、然り基督の福音は天下到る處、萬國の民に宣傳へられつゝある。何んとなれば吾人の宗教は天地の造主なる萬國の主宰者を宗とするの宗教である、即ち萬民のために十字架の上に擧げられ給ひたる神の子キリストに依て顯はされたる福音だからである。故に基督の福音は實に一國一民族にのみ限らるべきものに非ずして實にその響は全地に遍く其言は地の極に迄及ぶ(詩十九)へきものである。

●赤裸々

玉顔麗容の佳人も X 光線にて之を透視すれば物凄き裸々たる一組の骸骨のみ、佳人も醜女も何の變る處ないのである。オー紳士よ、淑女よ、君子よ、學者よ、「爾曹は白く塗りたる白き墓に似たり外は美しく見ゆれども内は骸骨と汚穢にて充つ」(太廿三)、こは神がその探索燈をもて諸君の心を見給ひて仰せ給ふ御證言である。「爾神の審判を免れんと思ふや」(羅二)

●來世の有無

哲學、科學や心理學を根據としての事ならば來世の有無を議論する程了見違ふ事はあるまい、何故なれば其は水掛論である、想像である、推論

である故、無いといふも不可、有といふも不可である。そんな事は學者にも博士にも解つた事でない、彼等は博學明識なる人々には相違なければ、彼等は目に見ゆる物質上の研究すら未だ幼稚なるのである、況んや靈界の事に於ておやである。世に未だ來世の有無を探知するに正當なる根據がないのである、根據なき議論科野暮なものはない。然るに吾人は來世に就きて大膽なる信仰を發表し又來世を憚らず天下に説くは「神しかのたまへり」てふ不變なる聖語に根據するが故である。而して實に神は來世の所有者なのである。

●空言なる理學

英譯には哲學(西二)とある、哲學は高尚にして深遠、雄大にして實に無限

なるものである、學問としては慥かに立派なるもの又奧妙なるものに違ない、然れ共靈魂の饑餓を癒し罪よりの救を求めん爲めには實に哲學は空言也、一滴の活水も與へざるべく一粒の生命をも我儕に與ふるものではない實に空言に外ならぬのである。

●神の我儕に賜ふ愛

神は敵をも愛し給ふ、神はその愛を我儕にも注ぎ給ふ、而して其愛を我儕に與へ我儕にも容易に人を愛する事を得しめ給ふ。神は我儕をして我を愛する人々は勿論、譬令我を愛せざる人、憎む人、我儕を害せし人、我を疎んずる人、われを苦むる人、我に不利を與へし人々に對しても何等の復讐せしめんともなさしめ給はぬのである、而して我儕をして彼に

謙だらしめ彼等を愛せしむるものである、オー神は愛也、榮は神にのみあれ、神の愛を讚美せよ。

●主耶穌を愛する理由

彼は天國の榮譽を佩び給ふ王なるが故に我儕主を愛する者でない、又彼は勝利者また全能者であるからでもない、彼は我に恵と永生とを與へ給ふが故でもない、我儕は唯彼御自身を愛するのである、彼は御自身を我儕に與へ給ふたからである、オー彼はわがために命を棄てし者(四二)である。

故に我儕は彼を愛し我が满腔の熱情を彼に獻ぐる、否生命をも獻ぐるのである、故に我儕は彼のために懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難に遭ふ

樂しきとするのである(哥後十)若し天國にても其處に主が在らぬならば寧ろ主と共にゲツセマ子に止まりたく思ふのである。而して此妙味は神聖なる愛を無視して肉慾のために、溫き愛情によりてせずして冷かなる黄金を抱かんがために、貧しき衣の中に燃ゆる美はしき愛情を得んとせずして綺奢たる風貌の胸に輝く虚榮を得んために結婚せんとしつゝある今の世の人情には到底味ひ得られぬ處のものである。

迫害よ來れ

近年のリバイバルとしてウェールズに起りし現時のリバイバルは實に讚美すべきものである。而して之は確かに天下の耳目を惹いた。教會の情眼を醒したものである。それと同時に我國の基督敎界にも大なる獎勵を

加へられたのである。「爾來リバイバルよ來れ」とは我教會の叫號である。實に我儕はリバイバルを渴仰するものである。而して早晚リバイバルは來るであらふ、我國に來るであらふ。若し來るなくんば我儕は更に「迫害よ來れ」と叫ぶであらふ、何んとなれば現今の教會は此二者何れかによりて一掃せらるにあらすんばならないのである。

勿論迫害そのものは、決して喜ぶべきものでないが沈滞せる我教會には必要である、多くの場合に於て刺戟は沈滞に愈さるを以てなり。今の教會は餘りに寛容なり、餘りに無頓着に失したり、餘りに平靜なり沈滞なり。沈滞する所必らず腐敗と俗化が奇生するを以て、我儕はリバイバルにあらすんば迫害を呼ぶものである、あゝ迫害よ來れ、迅風の如く大風の如く、暴風雨の如くに我が教會を振蕩せよ、限なく吹き荒れよ。

迫害よ來りて先づ其鋒先を講壇に向けよ、今や講壇の一變を要す、塵埃積んで十字架を掩蓋し去れり實に十字架は世の智慧、俗化、異端、新神學をもて隠されたり、之等の塵は容赦なく講壇より吹き拂はれねばならぬ、十字架の奧義が講壇の光輝であらねばならぬ。

迫害よ、次ぎに教役者を襲へ、然らば長く異端を包みて聽衆を偽りし説教者、野心や名譽やパンに眷戀たる傳道者、使命なきに聖職を把れる者は其椅子より離さるべく、殉教の精神なき數多の宣教師は帆を擧げて逸去すべし、文學や美術、骨董物を伴とし恭、將棊に耽けり居る傳道者を凡俗の中に吹き飛ばさしめよ、迫害よ更に轉じて信者に吹きかゝれ、キリストの神性を信せざる者、キリストの生命なき者、救はれざるものを吹き拂へ、俗化せるもの、キリストを愛せざるものを除き去れ。然ら

ば眞實靈魂を愛する教役者は殉教すべく、信徒の名簿や、受洗者の數のみを之れ求めたりし教役者は逃げ去るべし。是に於て講壇は潔められ、悉く殉教の英氣にのみ充されたる傳道者、宣教師のみによりて神の御用はなさるべし、信者の信仰は堅固になり鞏固にせられ、リバイバルも起るべく聖靈も降り給ふべし。あゝ迫害なる哉。

リバイバルよ來れ

我儕は既に迫害を斯く願ひたりしものにせよ之は我儕が窮策の一叫にして、我儕が眞正の渴仰は同じくりバイバルである。そは迫害は消極的にしてリバイバルは積極的なれば也、迫害は破壊的なり而してリバイバルは構成的なれば也。

我儕はイザヤの如く「願くは汝天を裂てくだり給へ、汝のみまへに山々ふるひ動かんことを火の柴をもやし火の水を沸すが如くして降りたまへと祈るものである。又ハバククと共に「エホバよ此の諸の年の中間に汝の運動を活潑かせたまへ此の諸の年の間に之れを顯現したまへ」(哈三)と祈りて、豫言者ヨエルによりて曰はれたる「われ吾靈を一切の人に注がん汝等の男女も豫言すべし」とある大リバイバルの來らん事を望んで止まざる也。來れリバイバルよ我國に、而して我教會全体をして迫害にまさる火のバプテスマを受けしめよ。

余輩は右の二項を昨年八月發行の焔の舌に記載したり、然るに僅々一ヶ月にして東都十有餘の教會は大なる迫害を蒙りたり、奇なりといふべし、因つて余輩は左の所感を認めぬ。

△余の叫びたる迫害

讀者は知らるゝならん、余輩は嘗て本紙第二百二十七號に於て「迫害よ來れ」と絶叫した。

果せる哉、迫害が来た而して會堂は壊たれ又は焼拂はるゝに到つた。然れども余輩は決して之を喜ぶものでない、余輩の叫びたるは此種の迫害ではなかつたのである。余輩の叫びたるは精神上の大迫害であつた。斯して余輩は衷心此度損害を蒙りたる諸教會に向つて篤き同情を表するものである。

而して此迫害たるや余の眞實叫びたるさ少しく其方面を異するさ雖も亦幾分余輩の望む効果なきにあらざりし點に於て満足するものである。

△淺草傳道館の破壊

諸會堂の迫害と同時に破壊せられたり。

余輩何なか言はん「善哉」と。若し夫れ、それによりて主の聖業に貢献する處あらんには凡ての傳道館倒るゝ亦佳なり、聖書學院破壊する亦喜ぶべし。人よ此等のものは唯主の福音と其榮のために建てられたる機關のみ。我輩の建物は勿論我輩の生命も唯主の崇められん事を期し此目的の爲めに存するのみ。然れば人よ、傳道館を盛んなりと言ふ勿れ、主の在す處盛なりと言へ。傳道館に限ると言ふ勿れ、聖靈に限る言へ。能力ある説教は我輩に限る言ふ勿れ、聖靈に滿されたる人は能力ありと言へ。榮光は唯主のもの、我輩は彼を崇む、而して破壊は更に大なる建設を來さん事を期す。

断片 (其貳)

●春は來れり

春光一條われらの天地を射て萬景自ら春色を呈しそめぬ、ア、春は來れり、春は來ぬ。

「視よ、冬すでに過ぎ雨もやみてはや去りぬ、もろくの花は地にあらはれ鳥のさへづる時すでに至り班鳩の聲われらの地にきこゆ」(歌三〇十三)
然れども世は永久の春ならず、我輩は早く此精神的冬の如き時代の去りて永久の春に會はん事を待つに絶わす。

●今は精神的冬の時

社會はいふ迄でもなく冷酷也、人心はいふ迄でもなく悲惨也、盲目我利
 くにして汚穢と邪念とに充てり。視よ、墮落と腐敗の程度は氷點より
 も降りて那落の底に迄で降りたるを、オー如何に寒さの強き冬よ。
 時代の思想も冷淡にして外宗教的傾向に向ひたるが如くに見れども内實
 は飽く迄でも非聖書的にして冷かなる一片の哲理也、信者の信仰を冷す
 寒冷なる思想は其勢漸く盛んにして新神學、自由思想等の風烈し、視
 よ心靈の自由と生命とを奪ははれて凍死する人々の多きを、オー如何に
 強き寒さの冬よ。
 是に於てか人々は或は文學の火を求め或は戀愛の焰に據りて此荒寒の寒
 野を忍ばんとすれども之れを防ぐに何の甲斐かあらん、神學とても之れ
 に絶え切る事能はざれば也。

我儕は唯聖靈の火によりて心裡の春を得つゝ來らん永久の春に會はん事
 を樂み喘ぐ也。

● 永久の春は來るべし

オー永久の春、聞くだに嬉しき永久の春、而して實に永久の春は來る也。
 こは主が我儕に約束し給ひたるもの、其血をもて印し給ひたる契約の場
 所、主が近き將來に於ける再臨の日に其幔を開きて我儕を其處に迎へ給
 ふ也。其處には我儕を害ふ北風寒威なく、氣は穩かに温く悲哀も苦痛
 も其跡を斷ち、新神學や高等批評の如き魔風は悉く追ひ退けらるゝの
 時、愛と自由と喜悦との滿つる處、之れ即ち永久の春、之を稱して新天
 新地といふ也。

●主耶蘇と悔改論

「夫れ我來るは義人を招くために非ず罪ある人を招きて悔改させんが爲め也」(太九〇)。

主耶蘇の此世に臨り給へる大使命は萬人を悔改めしめん爲なりき、故に我儕は人々に悔改の必要を述べたる也、悔改めなき信仰は不完全なる信仰也、悔改を説かざる傳道は人を救はざる福音也、天國を人の前に閉づる宗教也。

又我儕の主は天國の近きを説くや先づ悔改めよ(太四〇七)と曰ひ給ひたり、また悔改めずば亡ぶべし(路十三〇三、五)と宣給ひき、彼天に歸り給ふ時も「悔改と赦罪はエルサレムより始まり萬國の民に宣傳られん」(路廿

七四)と仰せられたり斯く悔改は主の大使命にして萬國の間に聲高く宣言せらるべきものにてありき、是故に我儕小なき乍らも悔改を叫けぶや高し、何んぞ今の世に悔改を説く人々の少數なる。

●威光の右に在す者

「彼は神の榮の光輝その質の眞像にて己が権能の言をもて萬物を扶持われらの罪の淨をなして上天に登り給へる」(希一〇三)主イエス也。オ一我儕の罪の淨をなし給ひたる耶蘇、彼は御自身の血をもて我儕を潔めたり、オ一恵ある耶蘇、彼は今や威光ある神の右に在す、我儕の心は常に其處を慕ひて餘念なし、我儕は其處に在す主を念ふ時に恍惚として絶えいる許りに感せらるゝ也、而して我儕の靈は遙かに其處に在す主を見

る時に我儕の愛は烈しく熱せられ清けき情操は一層の向上を覺ゆる也。
オー威光の右に在す者よ、早く來りて爾の聖め給ひたる民をば其處に一つになし給へ。

福音と神癒

余輩は元、神癒の恩恵を説くは傳道の妨害をなすもの、人を囓す者、教會を亂すもの、如くに考へしも夫は大なる偏見、大なる誤謬にてありき何んとなれば基督は最も大なる神癒の宣傳者にして彼は天國の福音と共に此恩恵を人々に配ちて妨げらるゝ事をなさざりしを以て也(太九〇)余輩は今以て其を思ふ時、自らの偏見と其淺薄なる議論をなせしを悔ゆる者、而して之れ神癒を反駁する人々に對して大膽なる所以也。

わが生涯

愛は私の富であります、之は天の父より繼嗣たる資産であります。

私は神の愛に由りて罪赦され基督の愛によりて天國の嗣子とせられまし
た私の収入は聖靈によりて注がる、神の愛であります(〇五) また兄弟姉妹によりて來る兄弟の愛であります。

私の室は愛をもて飾られまた私の衣食も愛によりて成れるものであります、愛は私の事業で神を愛し罪人を憐み兄弟を睦む事であります。私の記憶は神と人々より與へられたる愛であります而して自分が人々のために如何なる愛をなし、かは記憶いたしますまい、また記憶する必

要もありません。愛は私の人々に贈る贈物であります。私は其他の品物を有て居りません。而して之は神と兄弟より受けたるものにして此内一も自分で造り或は持つて生れたものではありません。或人は私を愛嬌者だとかお上手者と申します、併し乍らそれは自分で作るのでもなく又膳ふのでもありません故冷評されても又譽れても致し方がありません、神を讚美せよ。

信 仰は私の生命であります、私は信仰によりて救はれ信仰によりて潔められたのであります。

私は信仰によりて愛をば神より繼嗣いたのであります、私に巨萬の資金がありませんけれども信仰によりて要するものは幾干にても與へらるのであります、我には地位なく爵位なきも信仰によりて私は神の子た

る権能を與へられて居ります、私は信仰によりて未だ如何なる學者も識る事能はざる永遠の天國をば恰も見るが如くに望んで居るのであります。

信仰によりて我が病氣も癒され、信仰によりて幾多の辛苦に勝ちつゝあるのであります。

私は四面楚歌に圍まるゝ時、四方暗濛たる疑雲に包まるゝの時、われをして勇氣あらしめ我をして耐忍しめ倒れざらしむるものは信仰であります。

私は信仰によりて歩んで居ります。ハレマヤ

望 は私靈魂の錨であります (希六〇) わが信仰の羅計盤、わが行方を示す曙の明星であります (被後一〇十九)

我が信仰鈍り我が愛冷かゝりたる時われを起しめ我をして燃わたしむるものは希望であります。

私いまだ主を見ざれども之を愛し今見すと雖も信じて喜ぶ所以は頓て主に見ゆる事の望あるからであります。私今暫く各様の艱難に遇ふて憂ざるを得ずと雖も我をして耐忍ばしむるものは神イエスキリストによりて上へ召して賜ふ所の褒美を得んとする望あるからであります。主耶蘇の間もなく臨り給ふ望は我を深からん事を願はしめました、また聖徒に聖き生涯をなさしむるものであります。

私は愛に起居し信仰によりて歩みつゝ頓て久しく望みたる神の造營み給へる基ある京城に到着する者であります、ハレルヤ。而して

「是れ我儕の行によるにあらず唯神おのが旨と世の成ざりし先より基

督耶蘇の中に我儕に賜ひし恩恵に由なり(提後一)とは我心の讚美であります。

狂犬的人物

「活ける犬は死せる獅子に愈る(傳九)。

我儕は活動せざる大宗教家、死せる基督を説く大名士よりも又政治家や文學者に基督教なる皮を被せた信仰界の人物といはるゝ人々よりも犬の如き小人物にても活動てよく吼ゆる者を要するものである。活ける犬はよく吼ゆるが故に憎まれまた打たるれども彼はよく人々を警醒して盜賊の入る事を防ぐが故である。我儕は更に第十八世紀に溯りて一の狂犬的人物を想ふ。それは我儕は何處に行くも狂犬の如く看做され狂犬の取扱

を受けたり我儕市街を歩すれば石を投られ僅かに生命を拾ひしことも屢々これあり。我儕は説教に於て新聞紙に於て將た又諸種の雜誌に於て前代未聞の怪物の如くに書き記されしも我儕は之が爲に動かす益々奮て大なる人にも小なる人にも信仰の證をなし喜びをもて我事業を終る迄では貴重なる生命をも顧ることなかりし也」と述べたるジョンウエスレーを追慕し又彼を賞讃す。

夫れ犬と雖も其吼ゆるや故なきにあらず又徒に叫ぶものでない。必らずや主張あり抱負ありて吼叫するもの而して、其聲や響きて人々の睡眠を破り、人々をして恐るべき禍に備へしむるものである。我儕は死せる獅子の如くあらんよりは寧ろ活ける犬の如く生きん事を願ふ。而して福音の爲に絶叫し、怪しき異端の物影に向つて吼ゆるであらう、

主イエスの爲には狂犬の如くに取扱はるゝを厭はぬであらう、人々が救はれ信者を益する事の爲ならば我儕は甘んじて狂犬視せられ狂犬的人物と呼ばるゝ事を喜ぶものである。

理論よりも事實

千百の理論よりも唯一の事實は優りて能力あるものであります。該にも「百聞は一見に如かず」といふ事がありますが斯の如く如何なる理論も一の事實そのものを否定する事は出来ぬのであります。されば一言事實を語るは百萬言の理論を談するより遙かに優れるものであります。譬令ゆき斃れんとしつゝある渴者に喃喃水は酸素と水素とより成り其割合は斯様で化しては雲となり雪となると講釋するよりも一掬の冷水を彼に與

へた方が遙かに得策であります。彼の約翰傳九章にあらはれたる生來の
 警者がキリストによりて癒された時、何人も其事實を否定する事が出来
 なかつた、彼はパリサイ人エドヤ人また兩親等の多くの人々に對し「彼
 は罪人なるや否われ之を知らず我は警者なりしが今日明かになれる此一
 事を知る」(約九〇)と申して一步も退かなかつたのであります。かくして
 無學なる彼の證言は學識高きパリサイの人よりも遙かに能力あるもので
 ありました。

使徒たちも申しました「われら見し所聞し所のものは言はざるを得ざる
 也」(使四)と、時に有司、長老、學者、凡ての祭司等ペテロ、ヨハチの憚
 る所なきと且癒れさたる人の彼等と共に立てるを見しが故に駭すべき言
 がなかつた(使四〇十)のであります、ハレルヤ。然り而して今の世に於て

も最も必要なるは事實の證人でありませす、キリストは「わが證人となる
 べし」(使一)と仰せられたのは實に意味深き御言葉であります、主は我儕
 に對して爾曹わが傳道者となれ或は神學者、智者、論者となれと仰せら
 るゝよりも證人となるべしと仰せられたのは世に事實を破壊し得る何物
 もないからであります、また何人でも我に明白なる事實を有する時に之
 が證人たる事が出来るからであります。斯くして我儕は我が衷に事實を
 有する以上は躊躇せず大膽に語るべき事でありませす、實驗なき論者、
 事實を有せざる反對者は決して恐るゝに足りませせん、彼等の議論は壘上
 の兵法であります又彼等がなす壇上の雄辯は難船の經驗なき船長が甲板
 にて號令する様なものであります。

而して彼等がキリストの神性を否定する時に我儕は「神に非ずして如何

で人の罪を赦すを得んや」とユダヤ人の申したるキリストが事實我を
 赦し我を救ひたまへる明白なる實驗によりて彼の神たる事を主張すべき
 であります、又彼等がキリストの復活を信せざる時に、我儕は使徒行傳
 に録されたる記事、即ち復活せるキリストが弟子たちに約束し給へるべ
 シテユステの恩恵、聖靈のバプテスマは現代に於ても我が實驗となり居
 る事によりて使徒行傳一章の事實なるを證すると共に彼の復活の事實
 なる事をも大膽に語り得るのであります。また異端者が奇蹟が比喩であ
 るとか又は奇蹟の時代は過ぎたりと得手勝手な議論を吐く時に、我は醫
 藥によらず信仰によりて病癒されたる事實の奇蹟をば彼等に證して彼等
 の口を塞がしむべきであります。又聖潔、聖靈の盈滿を信せざる人々に
 われ言者の生涯に入りて後更に榮ある愛、喜悅また能力ある生涯に入ら

れたる事實をば彼等に示すべきであります。

天地の主なる神よ此事を智者と達者に隠して赤子に顯し給ふを謝す父よ
 然り是の如きは意旨に適へるなり(路十〇)。

愛する證人よ汝の持てる事實を證せよ。遠慮なく語れ、こは我儕は自己
 を隠し唯我儕に奇しき事實をなしたまへる救主に其凡ての榮を歸せしめ
 又聽く人々をして彼の活ける事を信せしめ且つ偏く其恵に與らしめんが
 であります。

オー證人よ語れ語れ、理論よりも事實を。之れは活ける主の命令で又我
 儕各の帯ぶる使命であります。

主の聖顔

女子の喜悅は其父母の容顔に接すること、妻女は其夫の機嫌よき温顔によりて喜悅をなし、處女の最高の喜悅は其愛人の輝ける顔にあるものであります、これあればこそ彼等は如何なる困苦をも如何なる辛慘をも物の數とは致しません。彼等は千萬の財産よりも耀々たる名聲よりも、卓越せる秀才よりも、何よりも彼よりも之を喜び又之れに優りたる喜悅を發見する事は出来ません、彼等は其最高の喜悅をば愛する者それ自身に有し居るのであります。

若し夫れ彼等が其愛する者に邪慳なる顔色を以て對へたらんには彼等の心痛如何計でありませふか、彼等の財産も、名譽も、地位も、自己を苦しめ、自己を阻ふものとなり果つるのであります。斯の如くにして、愛する者の幸福なる面影は彼等の生命にして彼等の幸福も喜悅も皆悉く

懸りて其愛する者に在るのであります。

而して、我儕信者の喜悅は主耶蘇の聖顔であります。主耶蘇の聖顔は我儕に對ひて何時も變り給ひません我が善良なる父母の慈顔に優り、善良なる夫の温顔よりも、偽なき愛人の情ある顔よりも尙ほ優りて我儕信徒に輝きたもふのであります。

あ、誰か主の聖顔に接して喜悅ばずに居られませふか、誰乎主の聖顔に接する時其愛に溶かされずに居られませふか、誰乎主の聖顔に接して慰籍を得ずに居られませふか。

斯くして又親を失ひたる子女は何によりてか慰籍せられませふか、夫を失ひ妻を失ひたる者は何によりてか其心を強めませふ、果敢なくも美はしき愛情の夢破れたる者は何によりて其心を喜ばしめ得るでせふか、――

主耶蘇の聖顔のみ。人生の醫し難き悲哀も、痛歎も、破心も絶望も主耶蘇の聖顔に接しては恰も長閑けき春の日に厚氷の融けゆく其の如くに解け去りてわが心は喜悅を感せずには居られません。

今を離る千八百七十年の昔、主は敵手にかゝりて無慘なる殺戮を受け、四面楚歌に満ちて其使徒等をも捕へんする光景、使徒等は戦々競々、其事の己等に及ばざらん事を怖れ聲を低うし盤居して人目に觸れざらん事を勤めました、會々三日の後、主は彼等の中に起ち、爾曹安かれとのたまひつゝ其刺されたる手と脅とを彼等に示し給ひました。

弟子達のこの時や如何なりけん「主を見て喜べり」と約翰は録して居ります(約廿)。彼等は喜びました、否狂喜したのであります、彼等は大聲をあげて四面楚歌なるを忘れたのでありませよ。

ダビデは歌ひて「われに聖顔のたすけあり」(詩四十五)と申しましたが、主の聖顔即ち主の臨在は實に百萬の援兵を得たよりも心強く又我儕を喜ばしむるものであります。

又わが希望西山に没し、我計畫中絶して四方暗澹、われ其中に彷徨とする時我に一條の活路を示すものは主の聖顔であります。ダビデは其詩に於て斯く祈りました「なんぢの僕の上に聖顔の光をかゝりやかせなんぢの仁慈をもて我を救ひ給へ」と申しました。

時に夜半夢破れて寂寥を感ずる時、心は千々の煩に裂れんとする時にても主の聖顔を見仰る時に「わが靈は髓と脂をもて饜さるゝ如くに飽くことを得わが口は喜悅の口唇をもて主を讚めたゝふる」事が出来るのであります(詩六十四)。

あゝ主の聖顔、あゝ主よ、「なんぢは人の子等に超越りて美はしく文雅そのくちびるにそゝがる」(詩六十) 我満腔の喜悦を抱きて爾に感謝せん、わが燃ゆる熱情を献て爾を讚美せん、「汝のほかには誰をか天に保たん地には汝の他に慕ふもなし」(詩七十三) 主の聖顔を有つ我儕の幸祈をば何に譬へて曰ふ事が出来ませうか。

然れども若し我儕が主を慕ふ外に他の物を愛する二心がありますならば、我心は決して主を喜ぶ事が出来ません、他の物とは世の汚であります、罪に屬るものであります。又其人が罪を悉く離れましても其心を主よりも強く引く處の者がありますならば彼は不幸なる生涯をなさねばなりません。嘗て或婦人が私に告白して「妾は今日迄で主を愛し奉ることよりもわが愛人に多くを献げ居たりし事を懺悔せり」と申されました。

勿論我儕は人情の清き愛をば圓滿に保たん事を重じなければなりません、が、主に對してそれ以上の高度を献げなければなりませんのであります、故に主は爾これらの者に遇りて我を愛するや(約廿一)と仰せられます、我儕は主に我と我が總てを與へてこそ初めて主の聖顔を我が所有として充分なる満足を得らるゝのであります。

あゝ主よ我れ凡て惜み持るものをば悉く棄去り、そは聖顔を遮る物にてありき、而して今は明に爾を見たてまつる。

断片 (其三)

● 無益の僕 (路十七〇十)

予は全力を擧げて傳道し熱心に勉めて成功せざりし時、われ無益の僕な

るや。否、我極めて成功し好結果を得たりし時、我は無益の僕たる也。予は此意味の如何なる意かを悟されたり、而して我成功せる時極めて謙る事を得たり。盖我得たる成功は我の得たるに非ずして我衷に在す聖靈なるを以てなり、若し夫れ、我より聖靈を取去りたるならば我は零にして空蟬にさも似たるなり、故に我は自己を稱して無益の僕なりと稱する也。願くは人我を呼んで手腕あり又雄辯なりといふ勿れ、唯無益の僕と呼び、而して我を用ひ給ふ神を讚美せよ。

● 我を審判者は主

(哥前四〇四)

或人は極めて余輩を賞揚し、或者は口を極めて余輩を罵倒し去つて顧みず、或者は余輩を敬慕して其後を追ひ或人は余輩を厭ふて其顔をさへ見

ざらんと欲す。彼と此恰も別人に於けるが如し、而して余輩は唯一箇一人なり。正邪孰れが適中せる、我自身さへも之を知らず、我を審判者は唯主あるのみ。而して、我は人の賞讃によりて誇らざるべし、又人の非難を聞きて悲まざるべし。

● 愛の鞭 (希十二〇七一)

神嘗て我を鞭ち給へり、我は苦しくして叫びたり。或姉妹書を寄せて其は愛の鞭なる事を以てす。我は思へり、愛の鞭は打る者の苦さよりも打つ者の心苦しきものなるを。我嘗て愛のために、或姉妹に對するに不愛憎また不親切なる鞭を以てしたりき、又我止を得ず或兄弟に對して無慈悲の鞭を以てしたりき、其事却てわれに苦痛なりき、我辛かりき。

而して我は我を鞭つ者の心情を知り、其鞭に安んじたり。

悪魔の信仰

聖書に悪鬼、悪の靈、サタン、悪魔といふ種々の文字が顯はされて居りますが、今私は其等の總稱をば悪魔といふ二字に聚めて申上げるのであります。故に悪魔とは凡ての悪の靈、サタンの主力、悪鬼の生命である事を知りて宜しいのであります。又聖書は儘に悪魔の行動等によりて別名を與へて居るのであります。

さて今、彼の信仰を申上げる前に一体信ずるとは如何なる事を曰ひ、而して悪魔は如何様に信仰して居るかを申上げる方が宜かろうと思ふ。譬へば今私が或る鑛山の鑛穴に降りようといたしまして坑口まで參たと

致します、すると其底迄で下るには數百尺もあり、處が坑の口より深底迄で一條の繩がぶら下つて居ります、そこで私は思ひますに「此は某の製つた繩だ大丈夫であらふ、ぶら下つても別條はあるまい、人々も使用して居るし確であらふ、切る氣遣はあるまい、うむ大丈夫だ」と合點ました、此點に於て私は其繩に關する或事實を信じて居るのであります。次に私は兩手を延ばして其繩に掛り地盤を離れました、私は全く彼の一條の繩にぶら下つたのであります、此に於て私は始めて繩を信じたのであります、今私の全靈全身が悉く此繩一本に釣り下つて居るのであります、而して私は其數百尺を容易に降り得るのであります。斯して讀者は繩に關する事柄を信ずる事と繩其物を信ずる事とが全く別である事が御わかりでありませふ、而して悪魔の信仰はイエスキリスト

に關する事を悉く信じて居ります。彼はキリストの神たる事を明に告白して居ります(太八〇)彼は救の道をも知つて居ります(使十六)其他四福音書に據る時は多くの引照を見出す事が出來ます、彼は實に凡ての奧義、すべての教理に通じて居ります。

彼は彼の唯一神信者や高等批評家よりも遙かに優等者であります、或高等批評家は主イエスキリストについて錄されたる聖書の御言を悉くは信じませんが、又ユニテリアンの人々は耶穌の超自然を信じませんが悪魔は信じて戦慄して居ります、悪魔は彼等よりも遙かに神の御言を信じしかも彼は己が上に來らんとする審判の事を讀む時に恐怖して止まないのではありません。又彼は熱心なる基督教信者であります。彼は基督の教訓の如何に尊きものであるかを知つて居ります。然し乍ら主イエスに對する信

念のなき信者であります、悪魔はユニテリアンや高等批評を好みますが又此種の信者、即ち基督に非ず其教の信者の殖る事に大賛成であります、こんな信者の殖るリバイバルならば彼は慥かに主動者であります、彼は多くの人々が基督教的になる事を望んで居ります、何んとなれば人がキリストに關する事を信じた處が誰も救はれません、主イエスの歴史上の物語を信じた處が誰も永生を得るものでありません、彼等は讚美歌をうたひつゝ、聖書を朗讀し乍ら地獄に葬られるから悪魔に取りては骨の折れない手段であります。或は基督教の道德を宗とし、教理に感服して信者の仲間入する人、宗教學校に養成されて宗教を注入せられ暗誦せしめられた教師や學生、日曜學校上りに洗禮を受けた者は悪魔と信仰を同じうするもので悪魔と其將來を同じうする人々であります。而して

人が更に一步を進めて主キリストを信せんとする時に彼は極力反對を試みるものであります、それは聖書に「主イエスキリストの事を信せよ」とでなく「主イエスキリストを信せよ然らば救はるべし」(使十六)とある故であります、神は一人の亡ぶるをも好み給はぬ様に悪魔は一人の救はるゝをも好まぬのであります。

キリストは永遠に迄で引かれある繩であります、而して我儕が如何程キリストに關ける事を信じても救はれません、我儕は悔改てキリスト御自身を信じなければなりません、即ち繩にぶら下る様に我が全身全霊も彼の御手に托せるのであります、彼は切れる氣遣ひがありません、パウロと共に「われ我が信する者を知かつ我かれに託したる者を彼かの日に至る迄で守る事を爲得と信すれば也」(提後一)と申すべきであります。あゝ

主イエスキリストを信するに於て是に到らずば眞に基督を信する者ではありません、彼は基督教信者であります、悪魔と信仰を同する者であります。願くは人よ、悪魔の信仰を看破して以て正確なる信仰の生涯をなされん事を勸む。

断片 (其四)

● 愛の涙

「斯て弟子は己の宿に歸れり、マリアは墓の外に立ちて哭きつゝ墓にむかひて俯む」(約廿十)

無頓着なる弟子は主の葬られし墓に來り其處に主の遺骸のなきを見て其儘立ち去つた、残れるは唯マリア一人、彼女は彼の最も愛する主の遺骸

の其處にあらざりしを見て如何に悲しみしかは聖句によりて推察する事
 が出来、あゝ彼女はさめくくと泣いたのである、涙は言以上の表情で
 ある、彼女は如何計り主を愛せしものぞ。
 嘗てスコットが詩に

薔薇は朝の露に濡るゝ折最もめづらしく

愛は涙に濕ひたる折こそ最と愛らしけれ

と歌ふた事がある。

我儕は聖靈の烈火に燃やされて萬丈の火焰たると共に又主に此種の濃情
 をも有し度く思ふものである。

●北清の殉教者

先年、北清の擾亂に際して宣教師ピトキンが可憐なる清國信徒と共に無
 惨なる最後を遂げし事は人々の知れる處である。

而して彼が其慘酷なる毒手の下に冥目せんとする一殺那、彼の遺せる妻
 への遺言はこれにてあつた

「最愛なる妻よ、若し我儕の幼児が廿五歳に成らば再び彼をして此支那
 に到らしめ以て此民に傳道せしめよ、之れ余が希望なり」といふた。

あゝ何んと壯烈なる最後ではありますまいか。

然り、眞に基督の愛を識るものは基督のために己が生命は勿論、最愛の
 妻子を献ぐるも尙は足らぬ事を思ふ筈である。

●傳道者

四年計前の或る雜誌に左の如く論ふてあつた。

「此世の標準より見れば基督教の教職は素より貴き者に非ずと雖も、其性質より之を論ずれば是れ最も高尚なるものにして帝王より更に優りたる地位にあるもの也」

と、蓋し彼傳道者は神學博士であるからでない或は哲學博士の稱號を有する故でもない、また彼は神學校、傳道學校卒業生なる故にも非ず、けれど彼は神より直撰せられたる神の代表者だからである而して此使命は天下の何物を以てするも買ふ事の出來ぬもの何人も望んで得られぬものである。之れあるが爲めに彼は此世の帝王以上にある者である。

嘗てピーチャーが此聖職に當らんとするエールの大學生に勸めて「諸君は少き小供等また青年等と交る時に、彼等に如何なる紳士よりも此牧師と共にあらん事を願ふとの感起さす程高尚で偉大で温良でまたポーロの如く基督の如くならねばならぬ」と曰ふた。
善哉、而して之よりも尙ほ大切なるは「聖靈に満さるゝ事」である。

●パンの問題

人が世に生存する限は皆パンを要す、パンは即ち衣食住を意味す、宗教家も政治家も、教育家も勞動者も日々飲む事の出來ぬもの、之が即ちパン問題の勢力ある所以である。

併し乍ら我等は「腹がひもじくては宗教も道德も役に立たぬ」(某雜誌所

載)とはいふ事が出来ぬ、何んとなれば夫は宗教道德の眞價を知らぬ人の議論、唯物的の思想、現世主義の言論である。勿論パン問題は前述の如くにして必要なる問題には相違なきも、人生は現世のみには非ざる故にパンは宗教道德以上の價値を有するものでない。吾人は太膽に「人はパンのみにて生くる者に非ず」(太四)と主張する。

夫れ衣食足つて禮節を知るかは知らねども、衣食足りて而かも禮節なき者の多きを如何にせん、人生は食ひて飲み、飲みては飽き、働いて消ゆるの外に何も目的がないとすれば、縦またあつても夫は附録の事とすれば人間ほど野暮なものはあるまい。

主義も主張も結局パンを根本としての相談であるとするれば人間ほど憐な者はないであらう。

あゝ聴け！パンをもて養はるゝ物質の奥に竊める一物は常にパン以上のもの、永遠と不朽とを叫びつゝあるではあるまいか、之が要求に應ずる者は唯生命ある宗教のみ、千萬斤のパンも之を救ふに足らないのである。

故に我儕はパンの問題を重んずると雖も生命の問題をばより以上に重んずる者である、而して道德は宗教に附副するもの之れ亦重んずべきものである。

絶えざる主との交通

「絶えず祈るべし」(撒前五〇十七)

とは一日一杯拵伏して長々しく祈つて居る事をいふたのでなく、絶えざ

をもて汝を讚たへん(詩六十三)

と申しました、然ればこそ斯る人は艱難辛苦のうちであり、不如意、失望の中にありても彼の口には笑みち隠れある心裡の平和は其顔に輝いて居るのであります。オー樂しき主との絶えざる交通よ。

人鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く主を求め、彼絶えいる計りに主を慕ふ時(詩十二〇一)主また懇に彼を想ひ給ふ(詩四十七)事の奥妙にして又神秘なる交通は筆や言に盡し得るものでありません。

而して此絶えざる交通は如何にして得らるゝでせうか、凡ての信者が願ひつゝも此生涯をなし得ざるは何の爲でありませうか。

こは彼の心に尙ほ此世の罪を慕ふ心あり、主に對して惜み持てるものあるからであります。彼には尙ほ主との全き結合を厭ふ舊き性質あるが爲

めであります。故に人が一切を主に献げ主の血に深めらるゝ事によりて出來得るのであります。

オー絶えざる主との交通。兄弟よ卿は此樂しき生活をなしつゝ居たもふや。

悔改めよ

野に呼る人の聲なる洗禮のヨハナがユダヤの野ヨルダンの畔にて、エルサレム及びユダヤを擧り、またヨルダンの四方より集り來れる人々に宣傳へしところのものは「改悔」にてありき。またペンテコステの日に於て數千の人々を對手に説きしペテロの福音もまた「悔改」にてありき。殊に我儕の主キリストが始めて天國の福音をカリラヤの湖邊に傳ふるや之れ

亦同じく「悔改」を説き給ふた加^{また}之^もキリストは悔改の宣傳をもて自己の使命とし給ふたのである。わが来るは義人を召く爲に非ず罪ある人を召きて悔改させんが爲めなり(路五〇)と仰せられたによりても明かである、尙彼が此世を離れて天に昇りたまふ時にも悔改と赦罪をば萬國の民に宣傳ふ可きことを語り給ふた、爾來一千九百年間^{せん}到る處に於て悔改が説かれつゝあるのである、ア、悔改！これ

誰の命令？

之は神の子キリストの命令である、君を造り君に生命と氣息とを與へたもふ宇宙萬物の造主なる神の御命令である、一國の君主或は一軍の長官の命令は如何に權威あるものであらふか、況して神と其子の命令は實に無限の權威を有するものである。イエス神の國の福音を傳いひけるは期

は満り神の國は近けり爾曹悔改めて福音を信せよ(可一〇十)

誰に對しての命令？

それは君に對して。何故なれば「往昔蒙昧し時は神これを不問に爲給しが今は何處の人にも皆悔改むることを命じたもふ也」(使十七) 縦し君が何處の國の人であつても又如何な階級の人であつても「何處の人にも皆」とある故に君は如何なに口實を設けても此命令より免るゝ事は出來ぬのである。

何を悔改むべきか

罪を！ 君が今迄で神を信せず人を害し己を欺きし罪、法律上道徳上熱れを問はず不義罪惡をば悉く悔改むることである、「人皆既に罪を犯したれば神より榮を受るに足らず」(羅三〇)「無きなどゝ人にいひてありぬべ

し心に問は、如何答へん」是故に汝等罪を悔ひ心を改めて其罪を抹る、事をせよ」(使三〇)

何故悔改ねばならぬか

罪には必らず刑罰がある、犯罪者に處分がある、罪の價は死なり」(羅六

三) 此の死とは肉体の生命が死すること、靈魂の無限き懊惱と苦痛とに

陥る事である、「イエス彼等に曰けるは我なんぢらに告ん、汝等悔改めず

ば皆同じく亡さるべし」(路十三〇)「ア、實に悔改めずば禍である。

然らば悔改めとは何乎

悔改とは罪を憎みて全く離る、事である、神に對して過去の犯罪を悉く

詫ぶることである、而して神に従ひ我儕の罪のために死にて復活たまへ

るイエスキリストを信仰する事である、「然ば今なんぢらの先祖の神エホ

バに懺悔して其聖旨を行へ」(申十〇)「神に向ては悔改め主イエスキリストに對ては信仰すべき事」(使廿一)をいふのである。

何時悔改むべき乎

君は何時迄で生きると思ひなさるか、七十迄で將た八十迄で、否それは

君の知つた事でない、或は君が左様考へて居らるゝかも知れない、然る

に神これに曰ひけるは無知なる者よ今夜なんぢの靈魂とらるゝこと有べ

し」(路十二)「神は能く君の運命をば知りたまふが故に斯く仰せ給ふ、今は恵

恩の時なり今は救の日なり」と、吾人は計るべからざる將來の期を確標

にすべきものでない、今といふ今、現在の時こそ罪より離れて救主を信

仰すべきの時即ち悔改める期である、「是故に今日もし其聲を聽かば汝等

心を剛復にする勿れ」(來四)

今悔改めると如何なる乎

今眞實に君が悔改めをなさるならば、父なる神は即坐に君が凡ての罪をば悉く赦し、新しき心―神と人とを愛する心―即ち永生を與へ給ふのである、斯くして君は今日この時迄で夢にだも想像得ざりし驚くべき平和に満さるゝ事が出来る。而して其時に必ず「子よ心安かれ爾の罪赦れたり」(太九)との確實なる經驗を得らるゝのである。

オー悔改めよ、悔改めよ、悔改めよ、悔改めよ、皆おなじく亡さるべし、其處にて哀哭切齒することあるべし。これ即ち愛なる神が我等に悔改を命じ給ふ所以である。

断片 (其五)

冬の基督

四季の變遷は循環りて今や嚴寒の冬となりぬ、花は去り鳥は歌はず、もろくの梢は緑冠を脱ぎて風色淋しく山も寂寞河も寥々、あゝ物靜なる冬の日！而も其夕は物淋しく其夜は萬感胸中に湧くの時なり。愛する友よ、其時こそ我等仰ぎて主の御聲を聴きたきもの也、彼は「爾曹安かれ」と仰せらるゝにあらざるか。淋しき夕、樓房に弟子たちを訪れ給ひたりし主は(約廿〇下)今も汝を訪れて居たもふ也、あゝ彼はシャロンの野花、谷間の百合(歌二)芳香薫しくして四時變なし(希十三)オー主よわが教主よ、不變の耶蘇よ、四時變り給はぬ王よ!!!

● 奸悪の世

送られて枯骨を滿洲の寒野に曝すあり。迎へられて温かき淫事に耽るあり。

沖の島附近に溺れしは露國の將士なり、萬民に歡呼せられて酒杯に溺るるは邦國の將士也。

百萬の貌貅を叱咤せる將軍は一小賤妓の一笑を得んが爲に懸渾焦慮す、國民は彼を呼んで軍神と呼ぶ故に我等は軍神の崇めつゝある者に献ぐる敬語なきに苦しむ。

社會は暴淫を壯とし鯨飲を賞す、東北の地百萬の生靈は寒天飢渴に泣く。吁々世は飽く迄で奸惡也。

● 我儕の愛國心

我儕は我國民に憎まるゝ事あり、然れ共我等は我國民を憎むこと能はず。彼等は屢々我等を誤解する事あり然れ共我等は彼等に怒る事をせざるなり、何んとなれば我等は最も此國民を愛するが故なり。然れども我等は屢々彼等に逆ひ、彼等と同一の行動に出ざる者、彼等の好まざる事をいふ者なり。我等は彼等の喜ぶ所を喜ばず、彼等の見て以て善と所を非とする事屢々なり、そは「我等の心に願ふ所と神に祈る所はイスライル（我國の）救はれんこと」(羅十) なれば也。

何故

△何故講壇が振はない乎

餅屋は餅を賣るから繁昌する。然るに傳道者が聖職の看板を掲げ乍ら、其實哲學や心理學の講義をして居るから繁昌しないのである。講壇が聖靈に満さるゝは勿論であるが看板に偽なし流に基督御自身を傳ふるに非ずんば講壇の不振は怪むに足りないのである。

△何故聖職が嫌ひ乎

亡ぶる靈魂を憐むの愛が無いからである。彼等は靈魂の救は如何計り貴い事であるかを知らぬ故である。つまり自己の救はれし事が如何に幸福なるかを實驗して居らぬ者、極言すれば救はれて居らぬ人即ち沈淪者になりて居る人にして聖職を嫌がる事は有り得べからざる事であります。

△何故傳道者になるのが厭乎

取りては聖職程厭らしいものはありますまい。苟しくも天來の救を味ふて居る人にして聖職を嫌がる事は有り得べからざる事であります。彼は種々なる理由と止むを得ざる情實を申立つるでせふ、然れ共それは皆口實で其實は厭なのです、何故なれば彼は此世の榮譽と金力とより離別しなければならぬが故である。若し夫れキリストの爲に此しきの事が厭ならば寧ろ信者をも廢した方が善いでせふ、地獄に往く方が増である。主は何と仰せられました「若し我に従はんと欲ふ者は己を棄て其十字架を負て我に従へ」(太十六)と、

是に於てか彼のフランシスやサヴォナローラの如き人士が己が家産と權門をも顧みず清貧に甘んじて福音の使者たりしは實に我等をして痛切な

る快感あらしむる者である。
 附記す。我等は斯く記し來りて信者は悉く聖職を把れ傳道者たれといふものではない、唯信者が聖職に對し傳道者に對する觀念の如何を論ずるものである。

● 献金論

△ 献金とは何ぞ
 献金とは己が手によりて得たる収入所得をば主と其聖名にある聖徒のため又罪人の救はれん爲めに聖別して献ぐる事であります。我等は歌ひて主の聖名を讚美し語りて主の聖業を證致しますが更に献金をもて其事の眞實なるを顯はし多くの人々をして神を崇むるに至らしむるものであります（番後八〇十）

△ 献金の精神
 献金は高額よりも精神であります主はエルサレムの殿に於て富める人々の多き献金よりも彼の養婦の「レブタ」二つを喜び給ひました、何となればそは彼女が神を愛する満身の愛の籠れるものであつた故であります。また主はパウロにより其額によらず神を愛する心よりして爲すべき事を命じ給ひました、即ち「各々心の欲ふ所に隨て施すべし愛ひてなすべからず又強ひてなすべからず、神は喜びて施すものを愛し給へば也」とあります。舊約時代に於きましては民みな収入の什分の一をば必らず主エホバの家のために献げましたが、併し民の精神が失はれてある時に神は之を喜び給ひませんでした却て献ぐる者を咀ひ給ふたのであります、馬拉基一〇十、十三にある「我なんぢらを喜ばす又なんぢらの手より受けじ」または「汝等かく献物を携へ來ればとはわれ之

を汝等の手より受くべけんや」との聖言は其を意味するものであります。

嘗て亞米利加の一農夫が友人に或る廣き圃園を示しまして此處より收穫物は皆神様の爲に献ぐるのであると話しました故友人は感服して聞いて居りましたが何んぞ計らん實は其田地は其人の所有中一番土地の悪い夏は早き冬は潤る場處であつたそうであります、自分の爲めにさへならぬものを神様に献げんとするは献金の精神に悖つたもの畏れ多い事であります、寧ろ神に最上の愛を拂はんと願よりして己が乏きところより壹圓を献ぐるは遙かに嘉すべき事であります。

△献金の方法 主は我等の献金を如何にして納け給ふでせふか、其祭壇は教會でせふか、若し教會と其牧師が主に忠實なるものでありました

なら其も其一であります、然れども若し其教會が俗化して居り牧師が福音に適はざる異端を吐いて居るならば決して其處に一錢たりとも献ぐるには及びません、そは却て主より與へられしものを浪費することであります、悪魔のために用ゆることであります。故に其教會は主の教會でなければなりません、斯る聖徒の團體には悦んで献ぐべきであります。また寧ろ竊かに聖徒の乏しさを賑し(○十三)窮乏兄弟を助け又憐なる人のポケットに注ぎ入るゝは主の悦び給ふ方法であります、主は「わが兄弟の一人に行へるは即ち我に行しゝなり」(○四十五)と仰せられましたのは良き證明であります。

△献金は恩恵である 「なんぢら諸事すなはち信仰と言と智識と凡の勉勵および我儕に向ふ愛心に富める如く此恩にも富むべし」(○七八)主

は献金は恩恵だと仰せられます又「受くよりも與ふるは福なり」(廿五)と實に萬有の神、榮光と富の父は我儕の收入我儕の所有をば祝して以て聖業のために用ひたもふとは感謝に堪えぬ神の恩ではありませんか、罪人なりし我が献ぐる物をして聖徒の徳を建て、魂を救ふ貴き御用のために用ひ給ふとは實に思ふだに喜びに堪えません、然れば献金は神の恩恵であります。

△献金の結果 勿論「地獄の沙汰も金次第」といふ様な結果があると思ふなら相違であります、我儕は如何程献金いたしましても又兄弟姉妹の乏しきを助けましても我魂がそれによりて救はれ罪赦さるゝ譯には参りません、キリストを十字架に迄で釘上げた我儕の罪は其様な金や銀千百萬貫を拂ふた處で罪滅にはなりませんのであります、救は唯神よ

り出づる恩恵による事であります。だが赤心より献ぐる献物に對しては主は大なる倍數によりて酬ひ給ふのであります、地に屬る物に對し天に屬ける富貴をもて拂ひ給ふのであります、少なく賤しき我が献物に對し主は多大の利子をもて酬ひ給ふのであります。又我が献金によりて人々が益を受け助を得、これによりて主は實に崇めらるべく罪人救はれて、天開け地革らん時我が享る冕の光いや増して加へらるゝことでもあります愛する友よ、その聖名にかなふ榮光をもてエホバに與へ献物を携へてその大庭に來れ(詩九十八)。

明白なる希望

多くの信徒が何故墮落するのでせふか、また何故熱心がなくなるのでせふか何故艱難辛苦に忍耐得ぬのでせふか、何故勇猛奮進主の御爲に十字

架を負ふの氣力に乏しいのでせふか何故浮世の娯樂を求めて主を愛する事より離るゝのでせふか。それには種々なる原因様々なる情實も御座いませふが要するに彼等は明白なる希望を有して居らぬからであります。若し彼が頓て起るべき我儕の希望なる主の再臨と共に伴ふ我儕の榮光、美はしき新天新地の奧義を明白に望んだならば、如何で其幸福に與らん事を願はずに居られませふか如何で墮落して永遠に亡ぶることを致して居られませふか、如何でか熱心に進み、聖められ、聖靈に満されん事を願はずに居られませふか、多少の困難に打負けて榮光の冕を失ふ事を懼れずに居られませふか、主を愛せず失せ去るべき世俗に愛着して居られませふか、凡そ此望を抱く者はその潔さが如く自己を潔くす」(三〇)

三)「望む所の福と大なる神すなはち我儕の救主イエスキリストの榮の

願れん事を望待たしむ、(多二〇)。

オー希望、信仰と愛と此三者は信者の生涯には是非必要なるものであります。希望を説かぬ傳道は不具なる傳道であります。願くは愛する友達よ、我儕をして一層希望を語らしめよ、又人々に之を説かしめよ。

傳道者の希望

近頃同勞の友が書を寄せて賢兄よ、多くの人が兄の爲に祈り居ることを覚え給へよ、然り主が愛兄のために祈り居給ふを覚え給へよ而して、猛進突貫せられん事を奮闘勇撃倒れて後に止まれん事を、而して父の國に於て日の如く輝かん(大十三〇)衆多の人を義に導けるものは星の如くなりて永遠に至らん(但十二)實に之れ小弟の主義小生の理想、小生の目的。小生

の信仰、小生の生涯に實顯せん事を勵み居る處に候と曰はれました。然り、此但十二の三、之れが傳道者の希望であります。

オ一人よ試に證渡れる夜蒼穹を仰いで天空に羅列せる星を眺めて御覽なさい、閃めく星の輝きは如何に美はしくまた、懐しく嚴かに見ゆる事
でせふよ、其奥床しき光輝は帝王の冕も女王の指環も及ばぬものであります、而して主イエスは其中の明星なのであります、實に彼等は諸
王の王なる耶蘇と其光輝を同うする者であります。

而かも永遠に光輝ある星！星この世の閃めく星晨も又眞球も金剛石も永遠に輝く事が出来ません、帝王の位も英雄の名聲も永遠に比しては實に瞬間なるものであります、故に彼等は世に於て汚穢また萬の物の塵垢の如く(晋前四)取扱はるゝを厭ひません、彼等の觀念は高く塵外なる無限の

世界にありまする故、罵らるゝ時は祝し窘らるゝ時は忍び諂らるゝ時は
勸めをなすのであります。

而して若しも彼が此望を離れて地の物を慕ひますならば彼は神前に傳道者として既に隨落せるものであります、彼にして若し此希望が無いならば彼の説教は勢ひ罪人に悔改を説き、又來らんとする審判を説いて世を警醒するに能力なくなり、彼は如何にせば人々の歡心を買べきか、如何なる説教せば衆に人望を得べきかに焦慮せざるを得なくなる、世人の歡ばざる十字架の教はあまりに不細工に見え、萬人を罪人と論ふは平和の使者にはあまりに不体裁になつて参ります、慾張り貧りても金を貯へんとする精神になり身分ある者を善い信者と呼び、貧しき者を疎んずる様になりまた安息日に一度お定の禮拜の外に七日が七日黄金禮拜をする

様になるのであります、而して其等の魂膽が都合よくゆかぬと辭職し落ち往く處は、會社員や、銀行員、オー希望、希望、特殊の希望、これ傳道者たる聖職にあるもの及び之れと同様な聖徒が特別に有するもの、之を望み之に勵まれ、倒れて後に止まん覺悟で其使命を盡さうではありませんか。

断片

●新約の賜物

我この事を爾曹に語るは我が喜なんぢらにありて爾曹の喜を盈しめんが爲なり(約十五)

喜悦は新約の賜物にして主の福音は大なる喜の音であります(路二)

黒雲濃く掩はれたるシナイの山顛より閃きし電光は我儕を泣かしめ、恐れしめ、戦慄しめ悲ましめましますけれども、カルバリー山の光榮ある十字架は我儕に傳ふるに平和を喜悦とを以てせられ、天の下、地の上、天地が人類の耳朵に囁く所は皆喜悦の聲であります。

故に喜悦なき信者は舊約の人であります、我儕の罪惡と悲哀とを擔ふて(賽五十)十字架に釘さ給へる主に其荷を委托せざる人であります。愛する友よ、卿は喜んで居られますか、絶えず十字架の光輝に楽しく暮らして居りますか。

●エホバと摩西

人その友に言談ごとくにエホバ、モーセと面をあはせてものいひ給

ふ(英卅三)
〇十一)

我儕も斯の如く懇切なる交通をば主に有したく思ひます。然り主は我儕を友と呼び給ひました(約十五)主の血汐は我儕をさへモーセの如く主と面を合せて對談し得る迄でに近づかしめ給ふ(希十〇)のであります。

●聖徒の顔

詩人フエテヤが嘗て

會衆派の婦人は皆美人なり

と申しました事があります、之れは當時その派の人々は信仰厚く、行爲清く如何にも婦人として婦人たり、聖徒たるに適ふ所のあつた事を歌ふたのであります。

美人、これは其容貌の美、血色の善のみを論ふたものではありません、また勿論白粉紅脂の美、流行の風姿をいふものではありません。

彼は容貌婉なれども愛にして温雅、意氣昂らされども其顔は平和と熱誠に輝いて居ります。又彼は美ならざれども氣品よく、悄然たりと雖も犯すべからざる勇氣と大膽とに満されたるもの之れ聖徒の顔であります。

モーセが四十日神と交りし時、彼の顔は輝きて日の如く。ステパノは石にて打たる時、天の使の如くに其顔輝いて居りました。

我儕も此種の美人であらねばなりません、罪人は彼によりて神を畏れ、惡める者は彼の顔によりて慰ある神を認むるに至る事であります。

●此日いつか晴れん

曰く戦雲、曰くストライキ
曰く紛擾、世界は雨ついで也。

(キアボリスナヤール所載)

世界は一日として戦亂、紛擾の絶えた日はありません、唯一日の寧日をも有しないのであります。

實に西米の空晴れて極南の雨となり、極東の雨やみたりと思へば北歐の地に暴風ある世界。

斯くして主耶蘇が再び臨り愛と正義を以て全世界を統御し給ふ迄では、世界の雨は決して晴るゝ事はないのであります。我儕は早く空晴れて美の太陽(三〇二)の照り出でん事を俟つ者であります。

●バイロンの悪口

彼嘗て、嘲笑ひて

われ人の教會に來れと勸むる者あるを知る、然れども未だ神に來れと勸むる者あるを知らず

と申しました、然れども之は大に我儕を警戒するの文字、大なる眞理を有する悪口であります。

蓋は萬人の要求に應ずる者は神にして教會に非ず救を與ふる者は神なるキリストにして教會の儀式ではありません、平和と安心とを與ふる者は教會の讚美歌にあらずして、讚美すべき神であります。

されば昔、エルサレムの大伽藍に來りしギリシヤ人も「我儕、耶蘇に見

えん事を願ふ」(約十二)と申したではありませんか。
 我儕は極力人々をして神御自身に來らしめん事をなすべきであります。
 而して其目的のために出來得る丈け人々を教會に勧誘すべきは勿論の事
 決して等閑にすべからざる事であります。

●われ誰をか恐れん (詩廿七〇一)

「我儕日耶曼人は此地上に於て神の外更に恐るべき者あるを知らず」
 は「日耳曼人が昔時の光榮と權勢とを恢復する事に反對する者をば予輩
 悉く之を鐵蹄の下に蹂躪し去らん」と普佛戰爭開始前に於て宣言した
 るビスマーシクの言であります。

我儕は神の民、此世に何物も我等を恐れしむるものは無いのであります。

其盛んなる意氣のある日耳曼人は勿論の事、其他如何に強大なる迫害も
 激烈なる反對も、大家も名士も、異端者も批評家も我儕を恐喝するに足
 りません唯畏るべきは神あるのみであります。

我儕は神を畏るゝ者であります、神に對し絶対的の服従を要する者であ
 ります此事のために必要ならば萬事を棒に振る事をも厭はぬものであり
 ます。

主は懇に我儕を教へて「身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼る
 勿れ唯なんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ」(大十〇)と仰
 せられました。而して主の使者は主をおそるゝ者の周圍に營を建てこれ
 を援くるのであります。

●汝の兄弟を愛せ

主耶蘇より我儕と同じ血をわけたる兄弟が貧しくあるを見る時に我儕はそれを看過して、あまりに必要でもなき衣服や流行品や裝飾品に多額の費用を拂ふ事は我兄弟を愛する事ではせよか。餘分の金の處置に困り何かを買はんと慮ふる事は兄弟に對する愛の途ではせよか。わが兄弟が患難辛苦して福音を傳へ居るに我救はれたりと濟して安樂な日月を送つて居るのはわが兄弟を愛する事ではせよか。また之れが神様を愛し奉り其聖旨を悦す事でありませよか。

聖語に斯く録されました即ち「世の資財をもち兄弟の窮乏を見て反て恵施の心を閉づる者は何で神を愛するの愛その衷にあらんや」(約壹二)兄弟

を愛せずして如何で未だ見ざる神を愛せんや」(約壹書)。

友よ、卿が若し兄弟を愛する事なくば地に在りても天に於ても最も憐なる者であります。「汝の兄弟を愛せ」とは斯く計り必要な事であります。

●此恵にも富むべし (哥後八〇七)

卿は人に施をなせる時、財をもて神の人のために盡したる時に其事を誇つてはなりません、謙つて感謝なさい、そは卿は神より更に恵まれたのであります、其時それだけ富める者とせられたのであります。

我儕の財をもて神の爲めにまた人の爲めに費したる金額は皆悉く天に財を蓄ふる事にして少しも無益になる事なきは勿論百倍の報酬を受くべしと約束せられて居ります (太十九) 故に我儕が施與をなせばなす程我儕の

富は天にて増殖て居るわけであり、故に主は「此恵にも富むべし」と仰せられました。されば自分の慾のために巨額の大金を費す程の富がありまして、神と人とのために其金を用ひぬ人は最も貧しき人でありま

●汝の所求は何なるや (帖五〇六)

昔アハシエロス王が王后エステルに申されました様に我儕の主耶穌も我儕に其要する物をば何物にても與へんとして居たもふのであります。汝の所求は何なるや必らず許さるべし、汝の願意は何なるや國の半分

唯我儕が確實なる要求をなさぬ故に主より其を受取る事が出来ぬのであります。主は求むる者を失望せしめ給ふことがありません、要求する者に與へ給ふ約束を反古にし給ふた事が御坐しません、君よ主は「汝の所求は何なるや」と仰せられます、然れば我儕は之に答へ明白なる要求を主に申上げなければならぬのであります、救でも聖潔でも神慮も聖靈も金にても我儕よりの要求に應ひて與へらるゝのであります、故に我儕この恵ある主を讚美しつゝ、大膽に其要求を認はし信仰をもてそれをば受取るべきであります。

●外面によりて審判する勿れ (約七〇廿四)

傳道者各々長所あり殊長あり其れがつまり傳道界の分業的使命となりて

夫々の發達と擴張をばなすに至るものであります。或者は下層への傳道に適し或者は上流への傳道に長じ、或者は教會に熟し或者は福音の宣傳に達するといふので神の國の御事業が圓滿なる發達を來すのであります。而して各々が其使命に忠なれば勢ひ他を顧みる事が出來ぬものであります。然るに道傳者にして彼は上流傳道に熱心なれども貧民傳道に冷淡なりと罵り、教會者必ずしも救靈者にあらざるを非難し、彼を非し之を駁するは偏見であります、猜疑の聲、外面によりて人を審判する罪であります。

●隠れたる献金

嘗て或姉妹が主の御用に献げん爲めに一枚の紙幣をば箱かに私の裏口

に入れて置きました。私は後に到りて此事に氣附いた事であり、また或時私は旅行にありて主を信する人の家に泊り居りましたが出發する時用意せんため鞆を整へました時に何時の間に入たるものによ一枚の紙幣が丁寧に納められあるを見出した事があります。あゝ其人々の隠れたる献金を誰一人知る人はありますまい、私も大なる謝意を心に満しましたけれども言をもて其人々に謝する事をいたしませんでした、晝の人々の心に添はん爲であります。嗚呼隠れたる献金、人々は讃めずまい、教會は麗々と報告致しませんでせよ、然れども此隠れたる献金を最も神の聖前に貴き献物でありました、而して隠れたるに鑒たまふ神は輝ける寶座にて明顯に報たもふのであります。

●聖徒の願

古來聖徒の願は悉く一致して居ります、即ち「神の榮光」の願れん事
 であります。彼等の願はもはや彼等自身の爲ではありません、彼等の祈
 禱も彼等の勉強も彼等の職務も凡ての事は皆この願より割出されてある
 のであります。此事のためには喜んで自己が名譽の損はるゝを厭ひません、
 彼等は其所有を失つて惜みません、彼は喜んで金を献げます、彼は己が
 欲せざる事にも勇んで其願を果さん事を勉むる者であります。往古
 モーゼは満心の力を込めて
 「願くは汝の榮光を我に示し給へ」(埃廿三)と祈り、またイスラエルの王
 ダビデは

「神よ願はく自を天よりも高くし榮光を遍く地の上に擧げ給へ」(詩七
 十五、十一)

と願ひ、主イエス御自身すらも

「なんぢの榮を顯さんか爲に」とて約十七章の祈をばなし給ひましたの
 であります、また使徒たちの祈も「願くは榮光と權力世々神にあれア
 メン」(彼前五)にてあり、頓て期革り人の子の再び願はれ給ふて神が贖
 罪の大業をば完成し給ふ時、聖徒の献ぐる讚美も「亦主よ爾は榮と尊貴
 と權威とを受くべきもの也」との辭であります、友よ卿は眞實その心と
 其生涯とに於てかく願ふて居られますか。

●ダビデ王の謙遜

「我は蟲にして人に非ず」(詩廿二)

之れはイスラエル大王國の帝王の辭であるとは思へない程謙遜な言語であります。こはダビデ大王が神前に叫びたる詞であります。彼一叫すれば四隣皆震ひ動き、彼一度號令すれば百萬の貔貅も相風靡するものでありますけれども彼は神前に出づる時自分は王者であり大國の主權者である事を考へませんでした。彼は蟲よりも劣れる罪人たりし事を思起しました、之れは亦彼がエホバに愛せられし秘訣でありました。我儕も己が爵位や地位を鼻にかけて居るうちは未だ潔められざる者神に悦ばる者(希十一)ではありません、我儕も潔められて彼の大王の如き美はしき心物を有しなければなりません、斯くなるには先づ彼の如く「あゝ我が爲に清き心を作り直き靈を新に起し給へ」と祈る事であります。

責めらるゝ者の友

生來の譬が罪の子として人々より賤められ辱められ母の胎を出でし以來四十年暗黒の世界を己が住家とする不運なる生活を送つて居りました、主は彼を憫みて彼の目を明かになし給ひし事は約翰傳第九章の記事であります。彼はその嬉しさ有難さの餘に主を讚美し、また憶面なく主の御惠をば證し致しました。處が其結果彼は人々より逐出さるゝの憂き目に遇はされ、人々よりは憎まれ迫害を加へられ、彼を生みたる両親さへ我子のために責任を負はなかつたのであります。あゝ之れは彼が始めて光明の世界を見たる日の出來事であり、始めて天地を見たる彼に誰も同情を寄する者はなく暗黒より光明に來れる不案内なる彼の生涯

に一言の慰籍を興ふる者はありませんでした。彼は却て苦められ責められたのであります。然る時に唯一人「彼等が彼を逐ひ出し、事を聞き彼を尋ねて之に遇ひ」(同五) 給へる御方は主御一人のみでありました。彼を癒し給へる力ある主は彼の前に立ち給ひました。主は如何に愛深き御方でありませふか、癒されたる彼、迫害の中に悲める彼の喜悅は如何でありましたでせふか。

彼は定めし「エホバ我方に在せば我に恐なし人われに何をなし得んや」(詩百十)と申したのでありませふ。また彼は兼ねて聞覺たる「わが父母われを棄つるともエホバ我を迎え給はん」(詩廿七)とあるは實際である事をも悟りて如何に慰められたでせふか。愛する友達よ迫害の時、責めらるゝ時、親しく尋ね給ふ主を仰げ。

新朗の呼聲

「我必ず速かに至らんアメン主イエスよ來り給へ」(黙廿二)

此は使徒ヨハネがバトモスの孤島に於て主の顯幻に接したる時の事を録したる最後の一節であります。而して彼の録せる黙示録は主の再臨に關して記せるものであります。元來彼の黙示録は其記事の解し難きと記事の奇怪なることによりて永年人々の目に觸るゝ事なくまた人々に讀まれなかつたものであります。或信者の如きは聖書全体を讀通したと申しましても此部分をば省いて居つたのであります。斯の如くにして黙示録は新約聖書中餘計に附のもの寧ろ邪魔の様に思はれて居りましたが、時期到りて神の聖靈は此書よりして驚くべき光をば輝き出しめ給ひました

爾來四十年今日迄で此の新朗の呼聲は新婦なる教會を振起し眠れる童女等呼び醒す様になりました。

今は夜半(〇十三)「我速かに至らんといふ」聲は次第に近くなり、頓て「新朗きたりぬ出て迎よ」と呼ぶ聲が待たる様になりました。

この様にして主基督の教會は彼の再來を忘るゝ事の出来ぬ様になりました、彼等は忘るゝ事が出来ぬのみならず、彼等は其事が如何なる有様にてあるや又は教會の將來が如何にせらるゝやを想廻らす様になりました。然れ共また此の世に於ては免れ難きことであります、此呼聲は斯く迄でも我儕の耳朵に響いて居るのに、故意と此聲に耳をそむけて居る者また耳を塞いで居る人、無頓着なる人々のあるは誠に悲しきことであります。私は此等の人々に向つて御注意を促し度い、之れは或る一派の者が

聖書にある唯僅の一二句に土臺して主張する一家説にあらずして實に聖書が三百二十回も繰返して居る極めて大なる預言であることを、又しかも之は主イエス及び天使また我儕の日々敬愛するパウロ、ペテロ、ヨハチヤコブ等に依りて語られある事を注意し度い、神の言は一句と雖も尙ほ信する足る況して斯の如くにして記されある事に冷淡であり又無頓着なる事は眞面目に聖書を読む人々の爲すべき事ではありません。而して又これが彼の山上の垂訓や播種の説教に於けるが如き「耳ありて聽ゆる者は聽べし」と仰せらるゝ主の御言葉「天地は廢ん然れど我言は廢せじ」と同様なる主の御慈言である事を考ふる時に實に耳塞げる者はこれを聞き空吹く風と耳背けたる者も其不心得を悔いなければならぬことであります。

斯して我儕まことに主の言を信じ仰いで主の御光に接する時、また夜
 静かにさらめく星の彼方を仰ぎ望む時われらの心に「我必ず速に到らん」
 との聖聲が手に取る様に感じます、而して此時我儕の心に印象せらる、
 主は一種異様今迄になき特種の榮光を有し給ふ様に感じます。然り主
 は再び來り給ふ時には嘗て在りし如く悲哀の人、罪人の狀、屠場に曳る
 羊の如くにはあらで實に「天下の諸王の君」(黙一〇五)「諸の名に超る名」を
 有る神の子の榮光をもて來り給ふのであります、人よ一國の帝王の榮光
 でさへ實に著きものであります、況して諸王の君たる者の榮光は如何
 でせふか、又此世の勝利者が百萬の歡呼に迎へらる、榮譽は如何に貴き
 もの如何に立派なるものたるかを知る人は我儕の主が諸の稱號を帯ぶ
 る者よりも尙ほ優れる名を負ふて來り給ふ時の事を想像することが出來

るでありませふ、然れば斯る榮光を拜したる使徒ヨハナは死者の如
 なりて其足下に仆れたと申します。

然れ共人よ、彼は我儕の許嫁せる新朗であります、故に我儕を恐れしむ
 るを以て能とし給ひません。ア、此貴き王は如何に優しき御方よ、彼は
 恐れ慄けるヨハナに手を按て「懼る、勿れ我は首先なり未後なり我は生
 者なり前に死しとあり」(黙一〇十二)と仰せられし如く我儕をも温に遇ひ
 給ふのであります、主は實に嘗て死しことありと仰せられて我儕を愛し
 給ふの愛を想起さしめ然して我儕が徒に恐る、ことこのなからん事を勉
 め給ふのであります、あゝ再び來らんとし給ふ主も昔と異り給ふことが
 ありません、彼は我儕を愛するの餘遂に御自身の命をも我儕の爲に損で
 給ひました、あゝ其なつかしき主は再び來り給ふのであります、何んと

嬉しい事ではありませんか彼は「我必す速かに到らん」と仰せられました、主に見え度きは主を信じ主を愛する者の切なる情愛であります。オ
 ー主よ、主は必す来り給ふや、然り主は「我必す」と仰せられました、
 アーメン、主イエスよ来り給へ。主よ我儕はかくして主の再臨の眞實な
 ると其如何なる状態にて顯れ給ふべきかを學び得たり、願くは更に如何
 にして主を待つに備ふべきかを我儕に示し給へ。

新朗の呼聲 (下)

「我必す速に到らん」との聖聲が愈々切迫して参りました、斯くして主
 は今夜にも来り給ひませふ「是故に爾曹の主の何れの時きたるかを知る
 されば怠りして守れ……意はざる時に人の子きたらんとすればなり」

(太廿四〇四十)とは主が預め其注意を促して居たも御言であります。

あゝ愈々主は近くなりました準備は如何に致しませふか、實に主に會ふ
 は聖徒が唯一の希望であります終生を通じたる最上の喜悅に満ちるの
 日であります、誰か止むを得ず又餘儀なく急ぎ立てられつゝ不承々に
 準備に取懸りませふか、實に雀躍しつゝ備ふるのであります、恰も許嫁
 せる處女が喜びつゝ婚禮の日に備ると同じ事であります。而して其準備
 は

(一)、潔して光ある細布を着る事(黙十九〇)主に見えんとする新婦の備ふ
 べきものは第一に之であります、これは深くして一點の汚なく一點の雜
 なきものであります又光あるもの、光輝は潔に附添ふたものであります、
 實に潔き靈の品性より出づる諸徳であります、かゝる聖潔はキリス

トの寶血によりて洗はれ聖靈によりて艶出せられたる衣であります。蓋
 の血にて白くせられたる白衣とは此事をいふのであります。又着るとは
 彼の所有物なる事を意味するものにして共有物や借物ではありません。生
 涯彼女のものである事を意味するものであります。故に聖徒個人々々が
 潔くなければならぬ事を指せるものであります。されば新婦たる者は唯
 キリスト御自身に掩はれて聖く見ゆるのでなく各自全く聖められ聖靈に
 満されなければなりません。此白衣即ち潔して光ある細布は何よりも
 大切なる主に見ゆる禮服であります。之れなくしてその樂しき筈に出づ
 る事が出事ません。然ば伯希來書の記者は懇にかく申しました「汝ら
 衆の人と和睦ことをなし自ら潔らんことを務めよ人もし潔らば主に見
 ゆることを得ざる也」またペテロは「然ば爾曹神の日の來るを待これを

速やかにせんことを務めいかに潔行をなし神を敬ふことを爲べき乎」
 (被後三)と警告いたしました。

(二二) 人の子の前に立得る様に常に祈れ (路廿六)

聖められし聖徒の常に忘るべからざる事は此の祈禱であります。これは
 潔められざりし時の弟子にのみ仰せられし御言葉ではありません。蓋は
 蛇の詭詐にエバが惑はされし如く爾曹の心壞はれてキリストに向ふの誠
 實を失はん事を恐るゝからであります (被後十) 我主より離れ居る今の時主
 に對する愛を他に移し居り乍ら主に迎わらるゝよりは實に咀はれた方が
 遙かに益であります。

(三三) 我來るまで商賣せよ (路十九)

商賣、商賣、主の歸りたまふ迄で亡ぶる靈魂を記入するのであります。

主は御自身の價貴き血汐をば資金として彼済のために拂ひ給ひました、
 げに主は一人の亡ぶるをも好みたまひません(彼後三)で、既に萬民のため
 に其代價を拂ひ給ひました、我済屬みて働かすば人々は空しく亡び主は
 大なる損をば受け給ふのであります、主人の損失を願ひぬ僕は愚かなる
 僕であります、主に見ゆるは愚か罰せらるべきものであります、人よ傳
 道者といはず我済聖徒は皆罪人の救はれんために力を盡し金を献げ、勤
 め又祈るべきものであります、罪人の亡ぶることを思はぬ者は主に同情
 なきものであります、主を愛する精神のなきものであります、「我きたる
 迄で商賣せよ」、ある一人きたりて曰けるは「主よ爾の一斤は此にありわ
 れ巾手に裏て藏置たりき……」主人曰けるは「悪僕よ我なんぢの口に囚て
 汝を鞠べし汝われは嚴者にて置ざる者を取まかざる者を獲と知、然るに

何ぞ我來るとき元と利を得んがために我金を兌換肆に預ざりしや」遂に
 傍に立る者に曰けるは此人の一斤を取りて他の者に與へよとは主が商
 賣せざる者に對する御處置であります。

あゝ主は益々近くなりぬ新期の叫びは遙かに聞ゆ、我済の備は如何に、
 オー新婦よ汝の新朗は來る、君は「主イエスよ來りたまへ」と答ひ得る
 樣準備して居られます乎若しも、此御聲が君の耳に楽しくないならば、
 それは未だ準備不充分なのであります、願くは我済悉く聖潔られ聖靈
 に充され忠實に勉めつ、「主イエスよ來り給へ」と朝夕常に楽しく叫び
 且つ歌ひ度きものであります。

願は平安の神自らなんぢらを全く潔し又汝等の全靈、全生、全身を守
 て我済の主イエスキリストの臨らん時に答なからしめ給はんことを。(完)

信仰餘談

定價 五錢
郵税 貳錢

六月上旬發行

吃舌を振ふの餘暇、秃筆を綴りて以て江湖の友人に語らんとするもの之れ信仰餘談なり。

我如何にして聖き生涯に入りしや

定價 貳錢
郵税 貳錢

こは聖潔を得んとする人、聖靈のバプテスマを受けんとする人々に献ぐる著者の實驗なり、來る六月上旬に發刊すべし。

ワットソン博士著 中田重治譯

白衣

定價 拾錢
郵税 貳錢

聖潔に關する良書にして歐米に於て祝福せられしもの之れ我國の兄弟のために翻譯したるものなり。

焰の舌

每週壹回 土曜日發行
定價 壹錢
郵税 五厘

更生、聖潔、主の再臨、神癒を明白に論じて信者を高尚なる生涯に導き全き愛のカナンの美果を得せしむる案内者なり。

極めて有益なる雑書

●神の律法 ●罪人の隠家 ●眞の安心 ●君の拜むべき神 ●難有い御話 ●
 罪の報 ●道の菜 ●百物はや備りたれば来るべし ●魂に對ふ熱情 ●放蕩 ●
 息子の世にも不思議なる名 ●眞の神よりあたへの福音 ●天国 ●イエス ●
 キリストの血 ●救の神 ●世にも珍らしき道 ●天国 ●福音 ●唱歌 ●緊急 ●
 問題 ●爆裂弾の宗教 ●今は恩恵の時 ●今は救の日 ●君が死時の準備は如
 何 ●以上千枚八十錢郵税四十錢 ●當學院發行
 此外彈丸トラクトと申して千枚三十錢の小トラクトがあります。一發で
 人の肺肝を貫くと云ふ極めて手答ある武器であります。亡ぶる靈魂を救
 はんとの熱情をもてる人々は之等を購求し、人々に配布しては如何です。

新版小冊子

天國案内、基督教を信する手續き。慰籍の言葉等數種

以上千部三圓別に郵税を要す

右は聖書の句のみを集めしもので美麗なる小冊子であります。

發行所

聖書學院

明治卅九年五月十一日印刷
明治卅九年五月十五日發行

(定價金拾錢)

著者 兼 發行人

東京市淺草區駒形十二番地

野邊地 三右衛門

印刷者

東京市京橋區銀座四丁目三番地

ゼー、エル、カウエン

印刷所

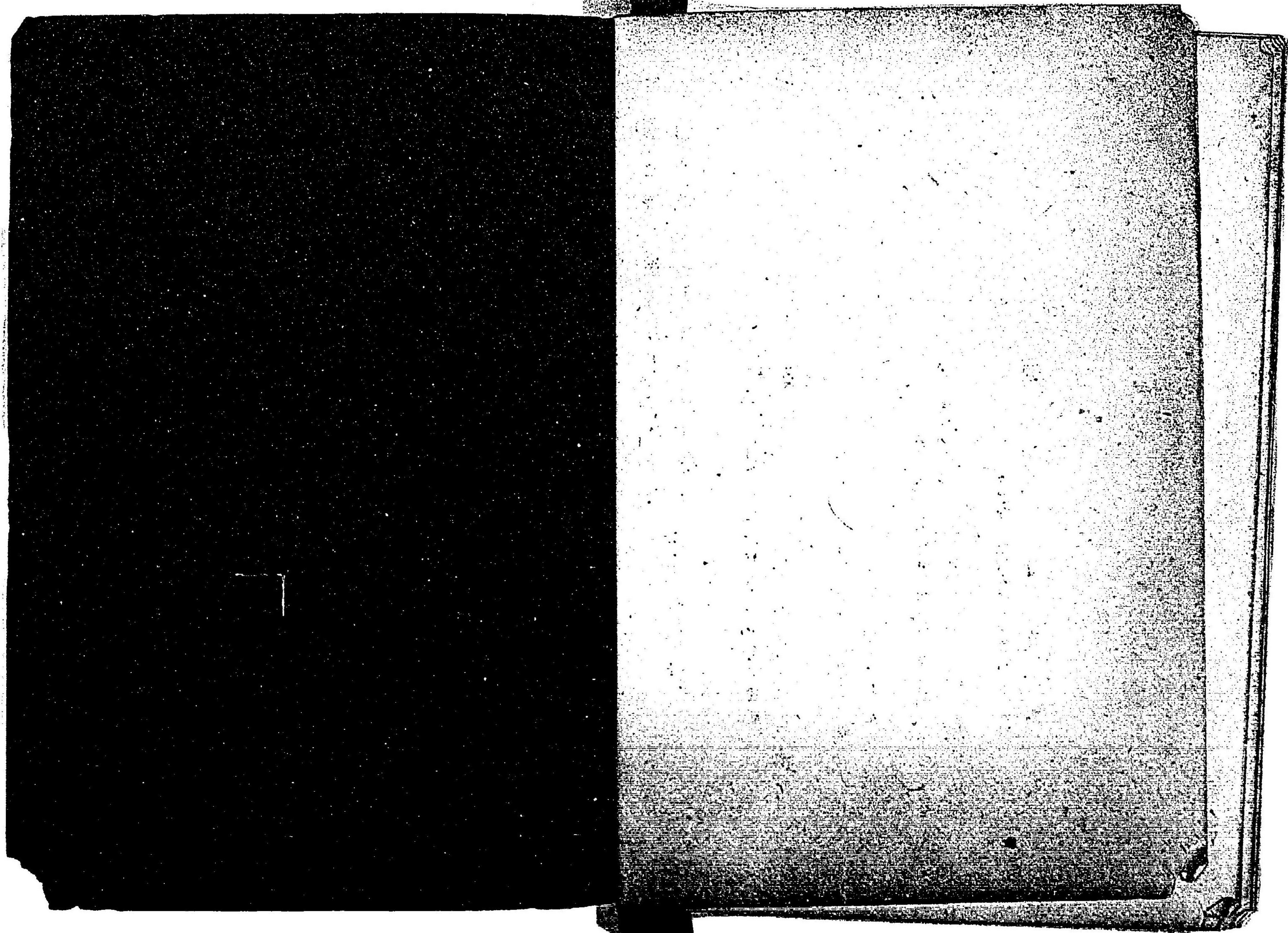
東京府豊多摩郡澁谷村字青山南町七丁目一番地

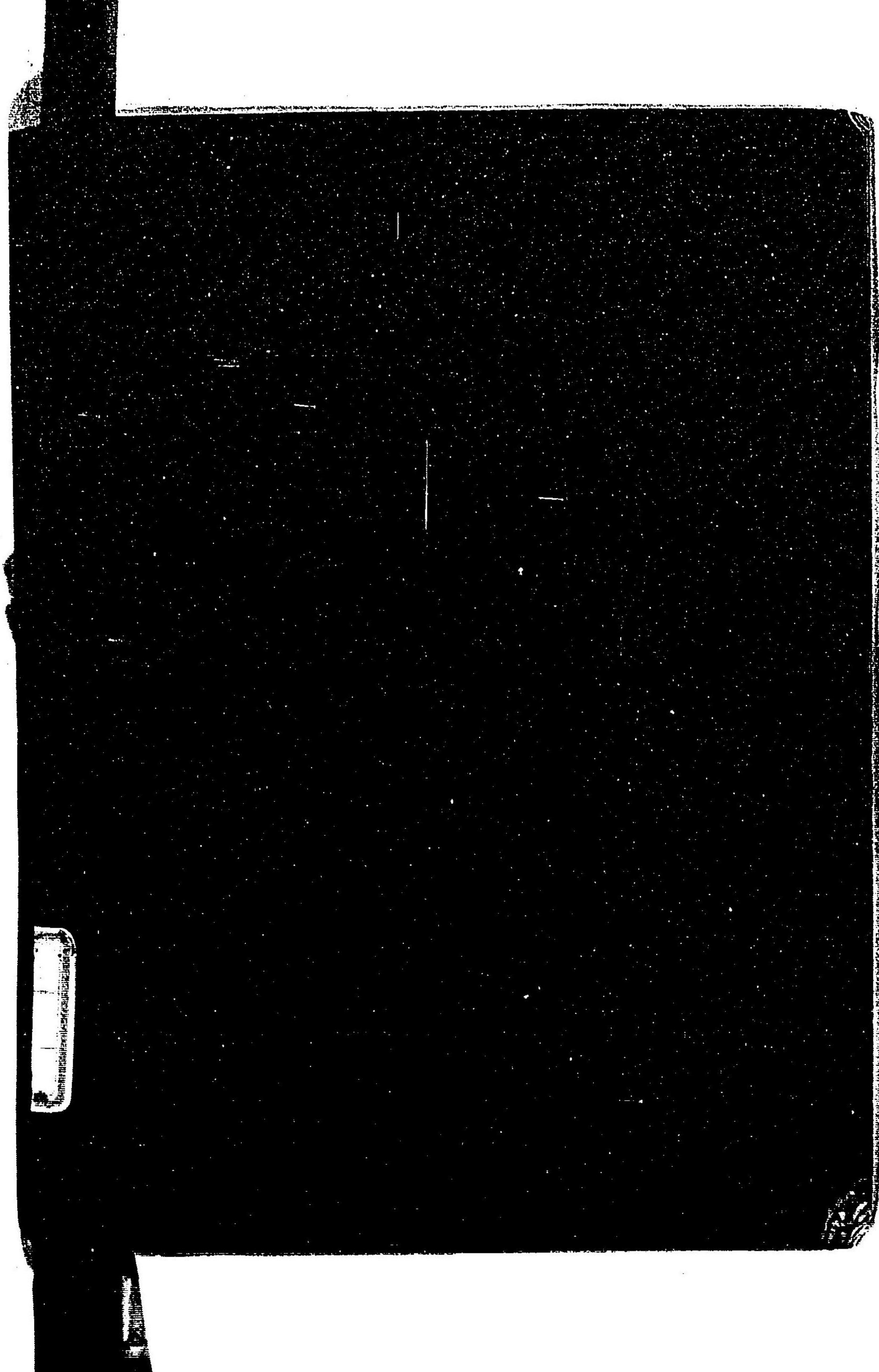
青山印刷所

發行所

東京府下淀橋町柏木三百九十一番地

聖書學院





020738-000-7

特63-423

純火焰

野辺地 三右衛門/著

M39

ABI-0558



